

60395

教科書文庫

6
810
3A-1949
20000 67139

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

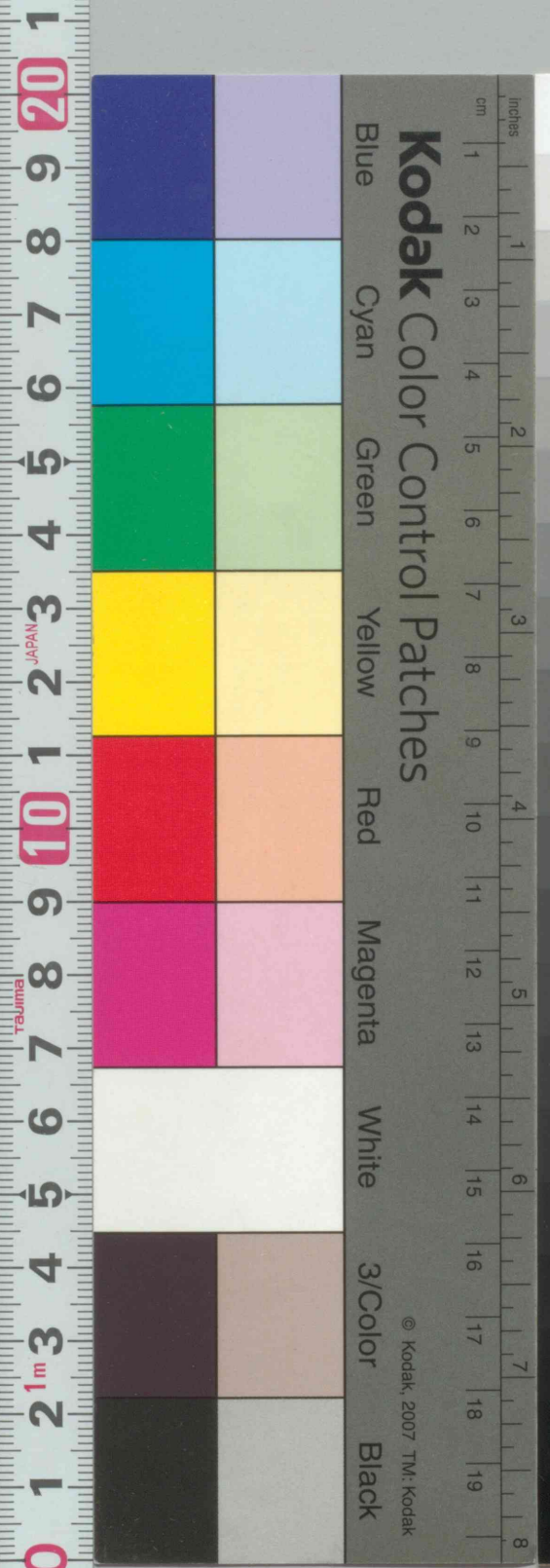


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



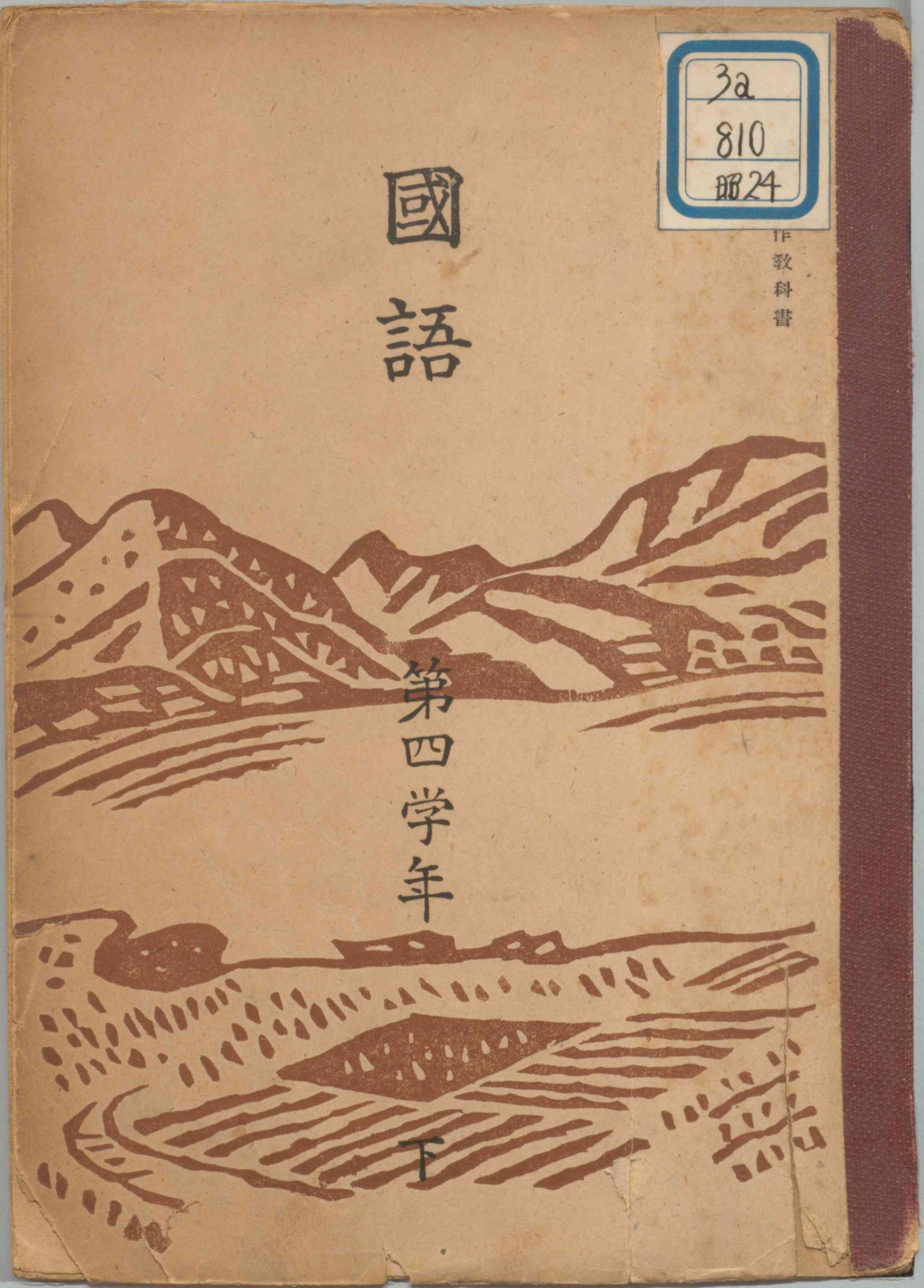
3a
810
冊24

教科書

國語

第四学年

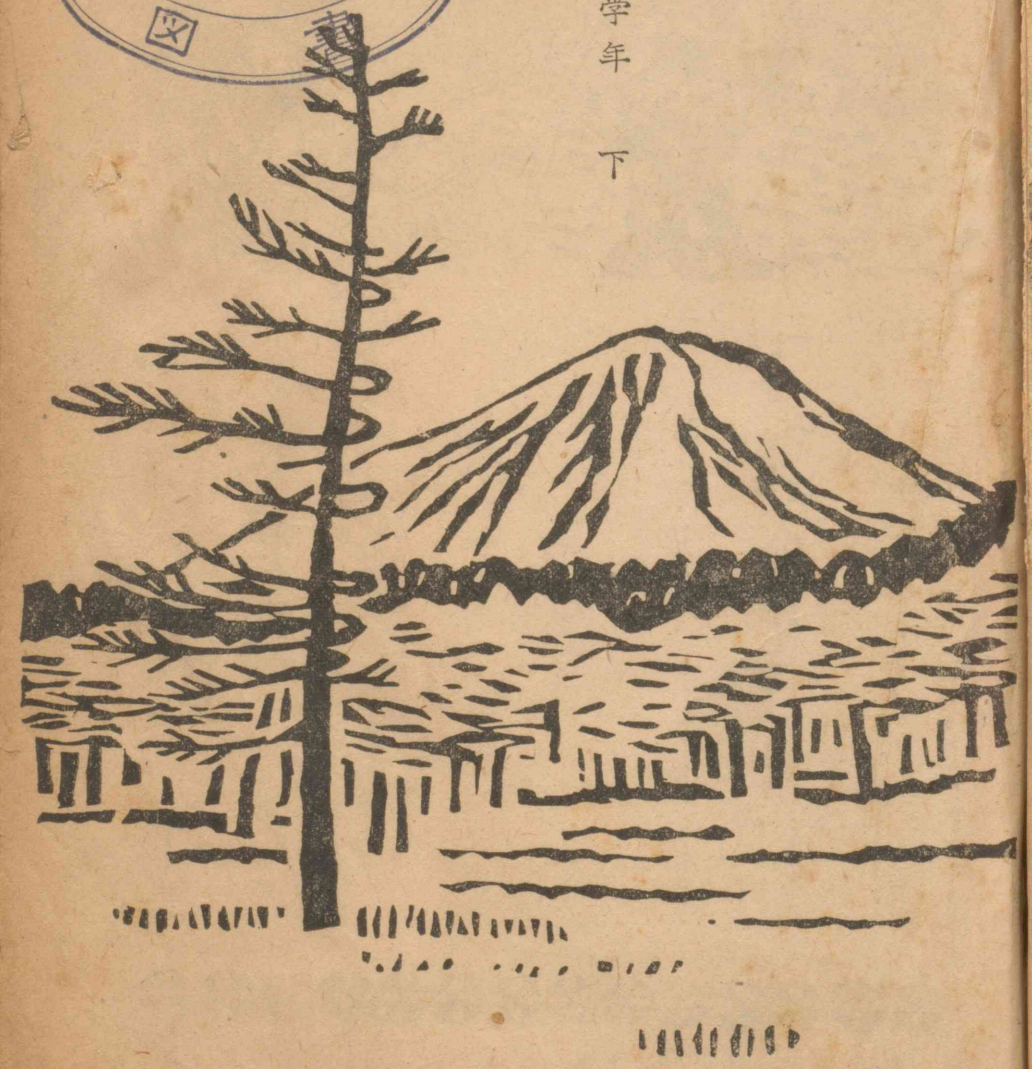
下



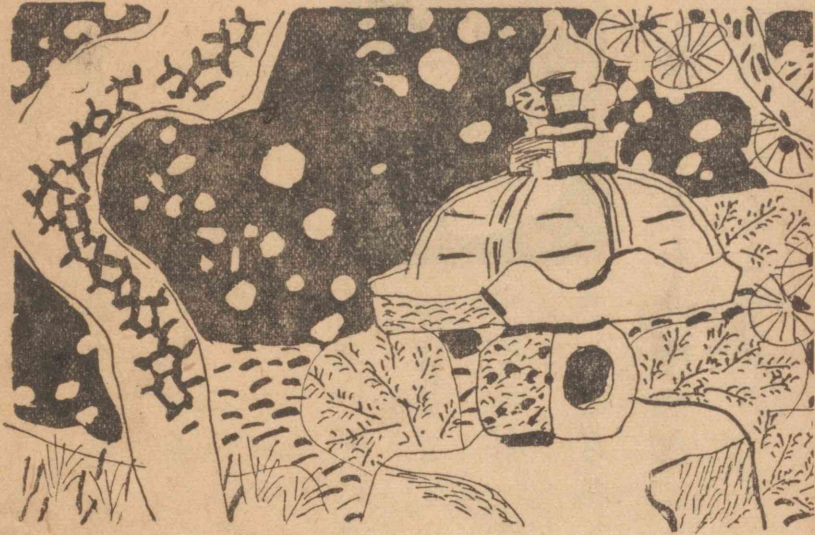
資料室 國



語  
第四学年  
下



3a  
810  
BB24



十二	一びきのくも……………百二十七
十一	いずみを求めて……………百十九
十	ちよ紙……………百十四
九	山のスキー場……………百四
八	なかよし……………八十七
七	貝づか……………七十六
六	どんぐりとやまねこ……………四十七
五	先生とみなさんへ……………三十一

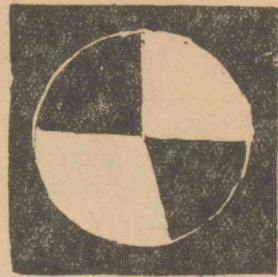


四	タやけ……………二十六
三	つばめ……………十五
二	音というもの……………十
	(三)
	(二)
	(一)
一	組みあわせ……………四
	もくろく



一 組みあわせ

(一)



白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。この赤い色のそばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感じられなかった明かるさがあらわれます。

黄色のかわりに、みどり色をぬってみると、また、ちがった感じがします。

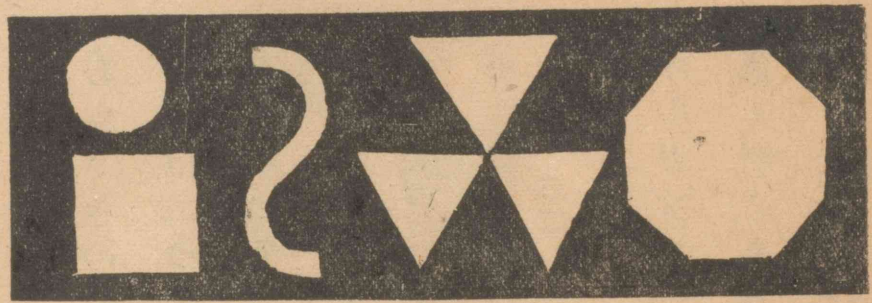
みどり色のかわりに、むらさきをぬったら、どうなるでしょう。

むらさきのかわりに、茶色をぬったら、どうなるでしょう。これは二つの色の組みあわせですが、三色の組みあわせにしたら、二色のときよりも、もっとちがった感じがするにちがいありません。四色、五色と数をましていけば、その感じはまたふかくなるでしょう。

(二)

オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まあと



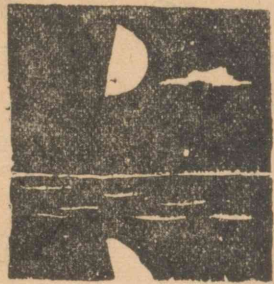
はちがった感じがします。

三音、四音と組みあわせてみると、さらにちがった氣持がします。

オルガンのほかに、バイオリンとか、フルートとか、ほかの楽器を、いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。音をうまくあわせると、とけあった美しいひびきとなつてきこえるにちがいありません。

色の組みあわせが、さまざまの感じをあらわすのと同じように、音の組みあわせも、いろいろな氣持をあらわします。

(三)



ここに、「月」という一つのことばがあります。このことばを耳にしたり、文字でよんだりしますと、夜のしずかなけしきを思い出します。

この「月」ということばに、「水」ということばをそえたら、どういふけしきを思い出しますか。「月」だけで思ひだした心の絵とは、いくらかちがったものがあらわれてくるでしょう。

この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、また広い海ともなります。

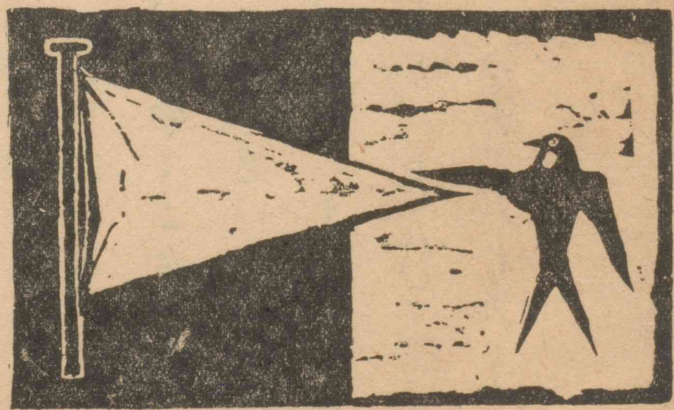
さらに、「虫の声」ということばを加えたらどうでしょう。

色の組みあわせも、音の組みあわせも、おたがいにとけあって、一つの感じをつくりあげると同じように、ことばの組みあわせも、それぞれちがった新しい思いをおこさせます。

「風」ということばに、ほかのことばをつけてみましょう。

「風」を「朝風」として、これにいろいろなことばをつけてみましょう。

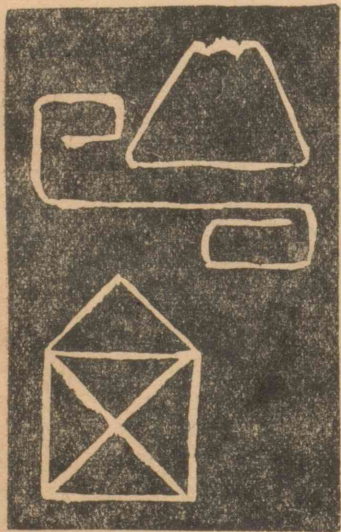
おしまいに、「山」「けむり」「絵はがき」「港」「友だち」など、い



ろいろいろなことばを組みあわせてみましょう。

二つか、三つのことばの組みあわせだと、すぐ心にもものを感じるか、思いうかべることができそうですが、あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃになって、まとまりがつかず、心の絵がみだれてしまいます。

これは色のばあいでも、音のばあいでも同じことです。

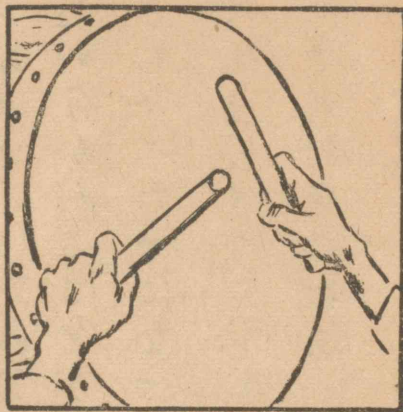


## 二 音というもの

このあいだ、ラジオで、「げき場音楽の話」をきいた。

その中で、たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、また、さまざまな情景を写しだすこともできるといふ話がおもしろかった。

その例として、まず、水の音をとりあつかった。水の音をたいこであらわすことなどは、ちよっ



と考えられないが、じっさいにきいてみると、たしかに水の音である。

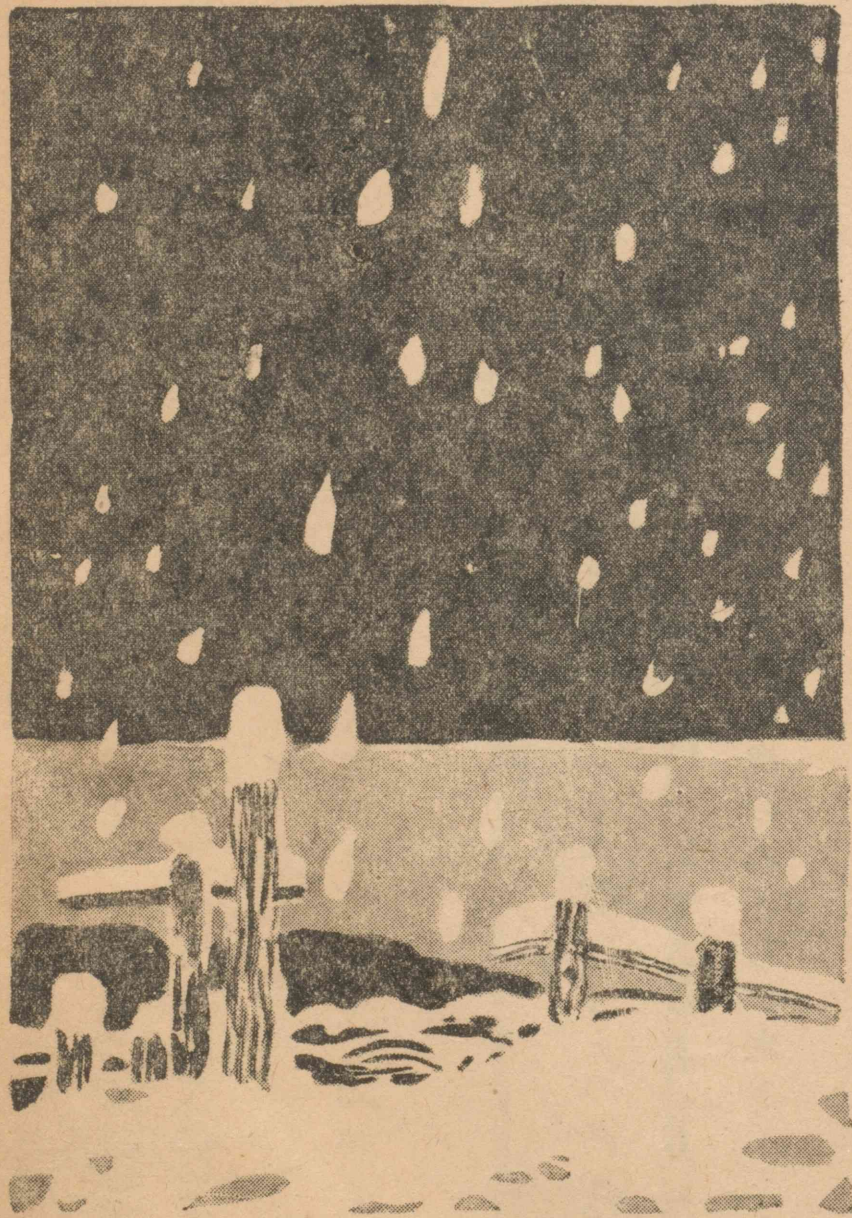
はじめに、川の水の音をたたいてきかせてくれた。川波がザワザワとたちさわぐところである。つきには、雨のふるところであった。それから、水の中にドブンとびこんだときの音もあらわした。おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。ドンドンとなる大だいこの音は、ほんとうにうちよせる波の音をきいているようであった。

つきに、風の音をたたいた。風といえば、「そよそよ」とか、「ザワザワ」とか、「ビュウビュウ」とかいうことばであらわしているが、それをたいこであらわすというのだからおもしろい。

よくきいていると、たしかに風の音になる。とうげ道にさしかかったとき、さっとふいてくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

風の音よりも、もっとおもしろいと思ったのは、雪のふってくるをあらわしたひびきである。たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち鳴らすのであるが、いかにも雪がしんとふりしきっているような気がした。

ただ一つのたいこが、そのうちかたによって、水の音にもなり、風の音にもなり、雪のふるようすにもなるのは、ふしぎである。





しばいで、ゆめをみていた人が、にわかに関目をさます場面を演ずることがある。こんなときにも、たいこをつかう。ゆめからさめるときには、音などはけっしてするものではないが、やはりたいこをたたく。

音というものは、情景をあらわすばかりでなく、心持まであらわすことができるものらしい。

いい音楽をきいても、それがわからないのは、その高さを受け入れるだけの心持をもっていないからである。もし、きく人の心が高ければ、それだけ音楽のねうちが生きてくることになる。

### 三 つばめ



夏の終りごろ、つばめが電線や物ほしざおに五六ぱぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。ときには、十ぱも二十ぱも、ずらりとならんでいることがあります。この中には、親つばめもいますが、ことし生まれた子つばめが、たくさんまじっています。もう大ききだけは親つばめと同じ

ですが、まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめほどこくありません。口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるのさえあります。

こうして、大ぜいのつばめが、ならんでいるのをみると、なにかしら相談でもしているようにみえます。まもなくさつていかなければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれません。これからいこうとする遠い國のことを、話しかけているのかもしれない。

やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさつていき、十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなってしまいます。

つばめのゆくさきは、遠い南の海のかなたです。

とうきょうから四千キロもあるフィリピンで、ある年の十月のすえ、子どもがつばめをつかまえました。すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金どくのいたがついていました。それによると、さいたま縣のあるところで、ころみに、しるしをつけてはなしたものだということがわかりました。

しかし、つばめは、もっともつと南へとんでいくのです。南洋の島々から、さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。

日本のつばめは、こんなふうに渡っていきますが、ヨーロッパ

パのつばめも同じように、ヨーロッパの北の方ではんしょくしたものが、秋には、南ヨーロッパを通過して、遠くアフリカまでもいって、冬ごしをします。

つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ鳥です。汽車や自動車もかなわないくらいの早さですから、なん百キロの海をひといきにとぶのも、けっしてふしぎではありません。しかし、その中には、ことし生まれた子つばめがたくさんいます。また、ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわないともかぎりません。

しゅうわ六年の秋、オーストリアの都ウィーンのできごとです。約十万ばのつばめが、きゅうに落ちてきたことがあります。その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、きゅうに十二月の氣候と同じ寒さになり、雨がふりつづきました。おりから南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、身動きもできなくなってしまったのです。ウィーンの動物ほご協会に、近くのランネルスドルフというところから、はじめて、電話でこのことを知らせてきました。協会では、喜んでつばめのせわをする返事をしました。それと同時に、協会ではすぐに、寒氣のために苦しんでいるつばめのせわをすることを、新聞に廣告しました。その廣告は、たいへんはんきょうをまきおこしました。

「かわいいそうなつばめをすくえ。」という運動に全國民が、加わったほです。

協会へは、電話が、ひっきりなしにかかって、つばめを集めていることを知らせてきました。そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さらに二台の自動車を加えました。そうして自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわりきっているつばめたちを運んできました。

さいわいなことに、そのとき、あいていた家が一けんあったので、協会では、おおいそぎで、その家をつばめたちのためにぐあいよくつくりなおしました。へやはいそいであたためられ、たくさんのはりがねがはりまわされて、つばめたち

のとまるどころがつくられました。

いく千というつばめたちは、人をおそれず、へやにはいつてくる人があると、たちまち、そのかたや、頭や、手にとまりました。

たくさんのつばめがはじめて運ばれてきたのは、九月十七日でした。その日はたいへん寒いあらしの日で、朝からばんまで、こやみなく雨がふっていました。ばんの十時に、二千ばのつばめが着きました。その夜半には、また一台の貨物自動車、五千ばのつばめをつんできました。

そこで、なるべく早く南のあたかいところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。航空会社では、お金をとら

ずにつばめを運ぶことを申しでました。つばめをのせた飛行機は、それから毎日のように、アルプスをこえてヴェニスへとんでいきました。それでも運びきれなくて、九月十九日のばんには、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたたかくした貨車を一つつけて送ったほどでした。

汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつぎのとおりです。

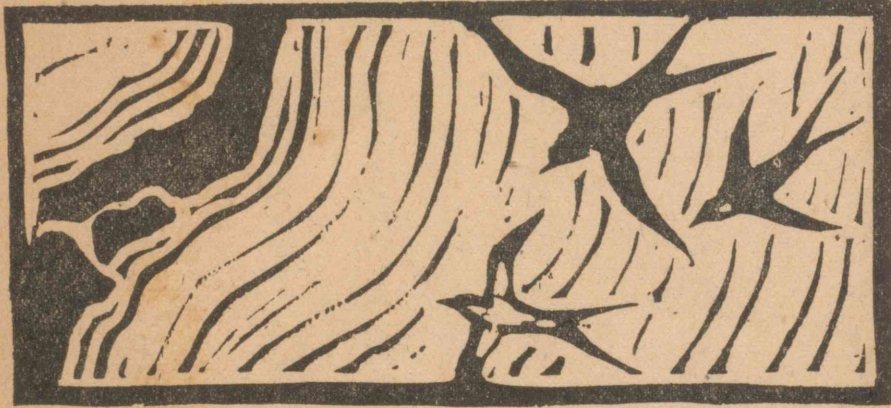
九月二十四日	飛行機で	二千ば
二十五日	同じく	二万五千ば
二十六日	汽車で	五万ば
二十九日	飛行機で	一万ば
十月一日	飛行機で	一千六百ば
二日	同じく	九百九十ば
五日	同じく	のこりの三十九わ

この合計は、約八万九千ばです。このほかに、オーストリア動物園の人たちがひき受けて送ったつばめを加えると、十万ばあまりになります。

そのころ、オーストリアは第一次世界大戦のあとで、またそのいたでがなおっていないところでした。しかし、この國の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめしたもつとも人間らしいあたたかい氣持は、この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。また、飛行機という文明の利器が、このしごとにつかわれたということ、たいへんありがたいことだといわずにはいられません。

むかしから、つばめは、同じ家に帰ってくるといわれています。つまり、ことしある家ののき下ですをつくったつばめは、来年また、同じすへもどってくるというのです。近年になって、いろいろな方法でこのことをしらべてみますと、やはりそうであることがわかりました。

日本からオーストラリアまでは、一万キロあまりもありますが、つばめは、けっして自分の國をわすれません。日本に春がくると思うと、もうやもたてもたまらず、北をさしてすすむのです。その小さなむねには、わか葉のもえる日本の春の美しさを思いうかべているのでしよう。あの家ののき下につ



つたふるすがなつかしいのでしよう。春になると、だれもが、このめずらしいお客の帰ってくるのをまちががれています。ちらりとつばめのすがたをみた人は、きっと、  
「きょう、はじめてつばめをみたよ。」  
といって喜びます。わけでも、自分の家へいそいと帰ってきたつばめをむかえる人の心は、どんなにうれしいことでしょう。

四 夕やけ

麦ふむやみだれし麦の夕日かげ

上げきを自分でつくるわらしごと

子もりするしずかなる月なの上に

かあさんがぼんやりみえるかやの中



こがらしや子ぶたのはなもかわきけり

月の夜をわが家のありしあたりまで

すみきったボールの音や秋の風

秋風にプールの水がゆれている

草原に一本あかしはじめみじ

二重にじ青田の上にくすれゆく

朝つゆの中に自轉車のりいれぬ

親のまたくぐる子うしや草の花

ほし草にかげおとしとぶとんぼかな

持ちかえしせんこう花火のゆれている

大空にのびかたむける冬木かな

かい道をきちきちとどぶばったかな

下雲へ下雲へタやけうつりさる

うらがれにおろされ立てる子どもかな

かやごしの電燈のたまみておりぬ

さるすべりラジオのほかにもなし

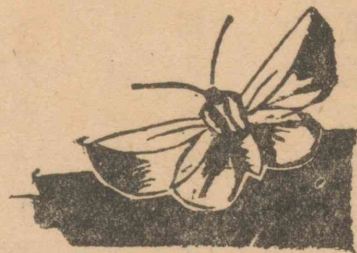


くれていくすをはるくものあお向きに

まえ向けるすずめは白し朝ぐもり

ひたいそぐいぬにあいけり木  
のめ道

歩みくるむねのへにちようと  
びわかれ



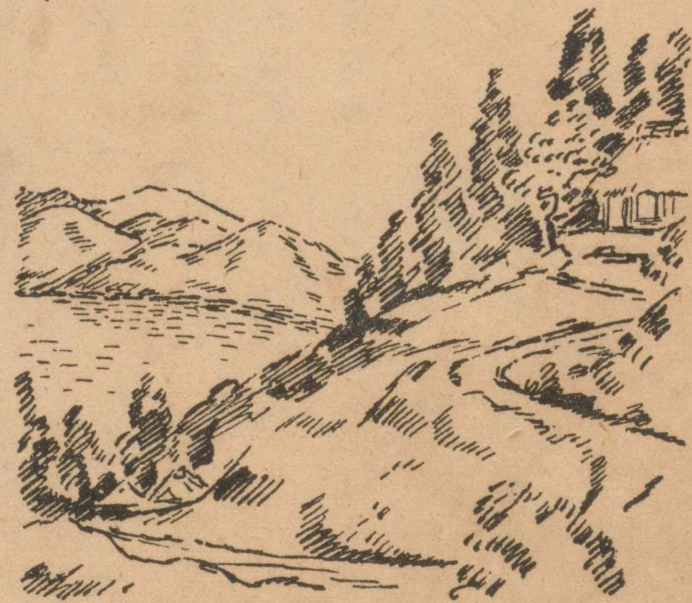
## 五 先生とみなさんへ

長らくごぶさたしています。こちらへきてから、もう四か  
月になります。こちらへきたときは夏の暑いさかりでしたが、  
いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近く  
なりました。

ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわす  
れたことはありません。先生のことを思うと、みなさんがう  
らやましくなります。

先生、おかわりありませんか。みなさんもお元氣ですか。

ぼくは、こちらへきてから、おとなといっしょに畑にでたり、山へたきぎをとりに行ったりするので、まえより元気で、からだもしっかりしてきました。ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、家のまえをちよつとでると、はるか下の方に美しい湖がみえます。



秋晴れのすみきった空の下に、

山のすがたが、さかさまに湖の中にうつって、がくにいられた油絵のように美しくかがやいてみえます。

この湖へつりにいくのが、いちばんの楽しみです。ふながたくさんいます。四五十センチもあるこいもいます。いなもいます。それから、らいぎよもいます。らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへってきたそうです。まえは、もつともつといろいろな魚がいたそうです。このほかに、大きな、黒くてひらたい貝がとれますので、なんども湖に近い川しもの方へとりにいきました。村の子どもがきょうそうでとりにいくので、たいそうにぎやかです。らいぎよは、大きなものになると、三十センチあまりもあります。三びきもどってくるど、うちの家族七人が、じゅうぶんたべることができます。

ぼくは、先生やみなさんといっしょに、この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。せめて、貝だけでもおみせしたいと思っています。

せんだって、はじめて畑のかいこんのおてつたいをしました。雑木林の一アールあまりのところです。母と、おばと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三日間かかりました。はじめに、雑草をかりました。それから、雑木を切りたおしてかいこんしました。大きな木の根がたこの足ののように四方にのびていましたので、木のかぶをほりかえすのは、よういではありませんでした。かずらの根をほるのも大へんでした。かずらの根は、二メートルあまりもはっているのがあって、ほねがお

れました。小さなぼくたちの畑がようやくかいこんされて、三日めにやっと、うねを十三本つくりました。

そうして、近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけして植えていきました。いもなえは、ぜんぶで三百五十本ありました。それは、七月の二十八日でしたが、村でいちばんおそい植えつけでした。



たきぎをとりに行く山は、ぼくの家からは十五六分ほど登るのですが、そこは、深い谷になっています。ここからは美しいかこうがながとれます。大きなかこうがんの岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり流れになって、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいていきます。

夏のあいだ、たきぎをせおって山からおりるとき、この谷まの流れにはいって、頭から水をあびるのが楽しみでした。また山へ登るほそ道の両がわに、まっかな、かわいらしい山いちごの実が、こぼれたように雑草の中にありました。手にとって口へいれると、つめたくてあまい味がしました。小さ

い妹のために、くわの葉につつんで持って帰ったこともあり  
ました。

ぼくははじめ、山へたきぎを  
とりにいくのが、すきではあり  
ませんでした。だいいち、じめ  
じめした足もとがきみがわるく、  
そのうえ、くまざさやいろいろ  
な名も知らない雑草がいちめん  
にはえていて、なにかでてきそ  
うです。なん十メートルもある



高いすぎやまつのはえているところは、晝でもうすぐらく、

日があたらなないので、雨のふったあとのようにぬれています。かれえだならば、だれの山の木のえだでも、おってよいことになっていきます。高くて手のとどかないかれえだは、長い竹ざおのさきにかまをくりつけて、ひっかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。ポキンという音がして、ガサガサと落ちてくると、うれしくなります。母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけて



やる方法を知らなかったので、えだぶりのよいかれえだのたくさんついている高い木をみつけると、兄かぼくがのぼる役をひきうけました。八九メートルもある木の上で、なたてえだをおろすのは気がつかれます。下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。上の方のかれえだをじゅんじゅんにたたき落とし、足もとのえだをおろして、やっどおりてくると、からだじゅうがあせです。

一ど、すぎの木で、根もとからかかっている高さ十五メートルに近い木にのぼったことがあります。のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。下では、兄や、母や、おばが、

「足もとをよくみて、氣をつけてね。氣をつけてね。」  
とか、

「そんな高いところ、あぶないから、早くおりておいて。などいわれたが、ぼくはがんばっておりませんでした。木が動くので、かれえだはなかなかたたき落せませんでした。なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。」

すこし氣がおちついてから、ぼくはあたりをみまわしますと、はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。また、下の方の山道を、しよいこをつけたおとなの人が、男か女かわからないが、下を向いて登ってくるのがみえます。道もないところから、木こりのすがたが

あらわれます。思わぬところに炭やき小屋があつて、ゆるいけむりのあがるのがみえました。

秋になって、ぼくは山へいくのが楽しみにになりました。ただんたき木とりになれたのと、山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。ぼくたちはがこの村へきたころは、湖には美しいしらさぎがたくさんま  
いおりていましたが、いつのま  
にどこへわたっていったのか、いまはもういなくなりました。

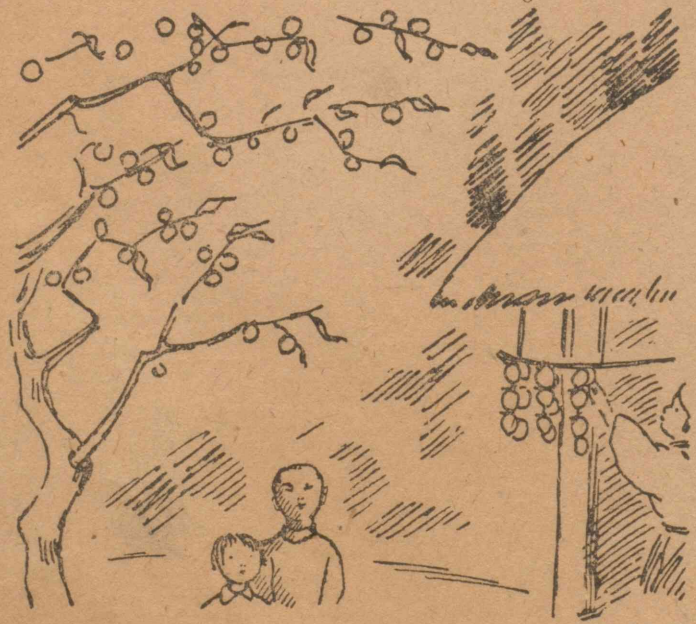


そのかわりまた、いつのまにかがわがわたってきました。かももきました。山には、つぐみや、ひわがきました。そのほか、名のわからない美しい小鳥がたくさんいます。

かきの色づくころ、畑のいもをほりおこしました。ぼくのうちでは、五日めごとにひどうねずつほりおこすことにしました。苦勞してかいこんした畑のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでいもほりをしました。

大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、むねがどきどきしました。母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになっていもをひろいました。

こちらはかきの木の多いところで、どこの家にも、二本や三本はあります。ぼくたちのかきりているやしきのまわりにも、大きなかきの木が三本あります。朝早く庭にでて、つやつやした大きなかきが、ころころと二つ三つ落ちているのをみたときは、思わず手にとりあげます。うちのかきはしぶがきですか、ほしがきにするために、母がかかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれす。



妹は、かきの葉を「きれいだ、きれいだ」といつてひろい集めては、ままごとをして遊びます。母やおばまで子どものように、かきの葉を一まい一まいならべて、この色がよいとか、こちらの色がよいとかいつてながめています。いつのまにか葉がすっかり落ちつくしてはだかになった木の上に、まっかにじゅうした実がすずなりになっているのをみると、いまにもものぼってとりたくなります。

この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ぼくもついていったのでした。ぼくはみなさんにあつてお話がしたいと思いましたが、いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかつてすぐ帰りました。

おばに、「小公子」をよんでもらいました。おばは、「小公子」の話にでてくる、セドリック少年のように、子どものころから、世の中のことに注意を向けるようにといわれました。ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんにやろうと思つています。兄は、大きくなって農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしています。





「小公子」のセドリックは、七つ八つのころでも、せんきよの  
ことを話していただけます。ぼくにはまだ、セドリックほ  
どわかりません。先生、「小公子」をみなさんにお話してあげて  
ください。

ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜んで書きだしまし  
た。もう、遠くの山々のいただきに、白い雪のぼうしがみえ  
ます。なつかしいそちらの山々の景色を思い出します。天気  
のよい日は、あの広い学校の運動場で、先生とみなさんが、  
ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

先生、みなさん。楽しく元気で勉強してください。

さようなら

## 六 どんぐりとやまねこ

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、いちろうのうち  
にきました。

「かねたいちろうさま。 九月十九日。

あなたは、ごきげんよろしいそうで、けっこうです。

あした、めんどうなさい判をしますから、おいてなさい。

どび道具を持たないてください。 やまねこ拜

字はへたで、すみもがさがさして指につくくらいでした。  
けれども、いちろうはうれしくてたまりませんでした。はが

きをそつと学校のかばんにし  
まっつて、うちじゅうを、どん  
だりはねたりしました。

ねどこにもぐってからも、  
やまねこのにゃあとした顔や、  
そのめんどうだというさい判  
のようすなどを考えて、おそ  
くまでねむれませんでした。  
けれども、いちろうが目を  
さましたときは、もうすつか  
り明かるくなっていました。



おもてにでてみると、まわりの山は、みんな、たったいまで  
きたばかりのように、きれいにもりあがって、まっさおな空  
の下にならんでいました。いちろうは、いそいでごはんをた  
べて、谷川にそつた小道を、上の方へ登っていきました。

すきとおつた風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと  
実を落しました。いちろうはくりの木をみあげて、

「くりの木、くりの木。やまねこがここを通らなかつたかい。」  
とききました。くりの木は、ちよつとしずかになつて、

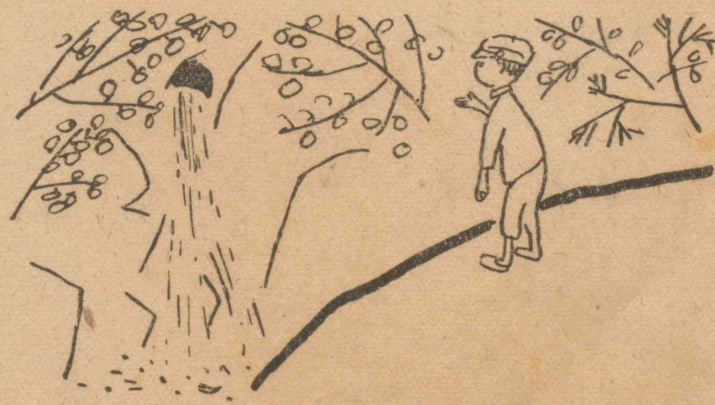
「やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいきまし  
たよ。」

と答えました。

「東なら、ぼくのいく方だねえ。おかしいな。とにかく、もっ  
どいってみよう。くりの木、ありが  
とう。」

くりの木は、だまってまた実をバラ  
バラと落しました。

いちろうは、すこしいきますと、そ  
こはもう、「ふえふきのたき」でした。「ふ  
えふきのたき」は、まっ白な岩のがけの  
中ほどに、小さなあながあいていて、  
そこから水がふえのように鳴ってとび  
だし、すぐたきになって、ゴウゴウと



谷に落ちていました。

「おいおい、ふえふき。やまねこがここを通らなかつたかい。」  
たきがピーピー答えました。

「やまねこなら、さっき馬車で、西の方へとんでいきましたよ。  
「おかしいな。西なら、ぼくのうちの方だ。けれども、まあ、  
もうすこしいってみよう。ふえふき、ありがとう。」  
たきは、またもどのようにふえをふきつづけました。

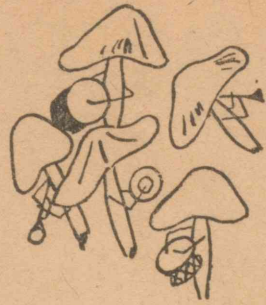
いちろうがまたすこしいきますと、一本のぶなの木の下に、  
たくさんの白いきのこが、ドツテコドツテコと、へんな楽隊  
をやっていました。

いちろうは、からだをかがめて、

「おい、きのこ。やまねこがここを通らなかつたかい。」  
とききました。すると、きのこは、

「やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方  
へとんでいきました。」

と答えました。



いちろうは、首をひねりました。

「南なら、あっちの山の中だ。おかしいな。」

まあ、もうすこしいってみよう。きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、ドツテコドツテコと、へ  
んな樂隊をつづけていました。

いちろうが、またすこしいくと、一本のくるみの木のこず

えを、りすが、ぴょんぴょんととんでいました。いちろうは、  
すぐ手まねきして、それをよびとめて、

「おい、りす。やまねこがここを通らなかつたかい。」

とたずねました。すると、りすは、木の上からひたいに手を  
かざして、いちろうをみながら答えました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに、馬車で、南の方へ  
とんでいきましたよ。」

「南へいったなんておかしいなあ。けれども、まあ、もうす  
こしいってみよう。りす、ありがとう。」

りすはもういませんでした。ただ、くるみのいちばん上の  
えだがゆれ、となりのぶなの葉がちよつと光ったただけでした。

いちろうがすこしいきましたら、谷川にそった道は、もうほそくなってきてしまいました。そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

いちろうは、その道を登っていきました。かやのえだはまっ黒にかさなりあって、青空は一きれもみえず、道はたいへんきゆうな坂になりました。いちろうは、顔をまっかにして、あせをぼとぼと落としながら、その坂を登りますと、にわかにはっきりと明かくなって、目がちくつとしました。そこは美しいこがね色の草地で、草は風に



ザワザワ鳴り、まわりは、りっぱなオリーブ色のかやの木の森でかこまれていました。

その草地のまん中に、せいひくい、おかしなかつこうの男が、ひざをまげて、手に皮のむちを持って、だまってこつちをみていたのです。

いちろうは、だんだんそばへいきました。びっくりしてたちどまってしまいました。その



男はかた目でした。そうして、みえない方の目は、白くびくびくうごき、足もひどく曲がってやぎのようですし、ことに、その足さきは、しゃもじのようなかたちだったのです。いちろうは、きみがわるかったのですが、なるべくおちついてたずねました。

「あなたはやまねこを知りませんか。」

すると、その男は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、にやつとわらっていいました。

「やまねこさまは、いますぐにここへもどっておいでになるよ。きみは、いちろうさんだな。」

いちろうはぎょつとして、ひと足うしろにさがって、

「ええ、ぼく、いちろうです。けれども、どうしてそれを知っていますか。」

といいました。すると、そのきたいな男は、

「それなら、はがきをみたらう。」

「みました。それできたんです。」

「あの文章は、ずいぶんへただったらう。」

と、男は、下を向いて、かなしそうにいいました。

いちろうは氣のどくになって、

「さあ、文章はなかなかうまいようでしたよ。」

といいました。男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳のあたりまでまっかになり、着物のえりを廣げて、からだに風を

いれながら、

「あの字もなかなかうまいか。」

とききました。いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。

「うまいですね。四年生だってあんなには書けないでしょう。」  
すると、男はまたいやな顔をしました。

「四年生というのは、小学校の四年生だろう。」

その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえたので、いちろうはあわてていいました。

「いいえ、大学の四年生ですよ。」

すると、男は、また喜んで、顔じゅう口のようにして、に

たにたわらっていいました。

「あのはがきは、わしが書いたのだよ。」

いちろうは、おかしいのをこらえて、

「いったい、あなたはたれですか。」

とたずねますと、男は、きゅうにまじめになって、

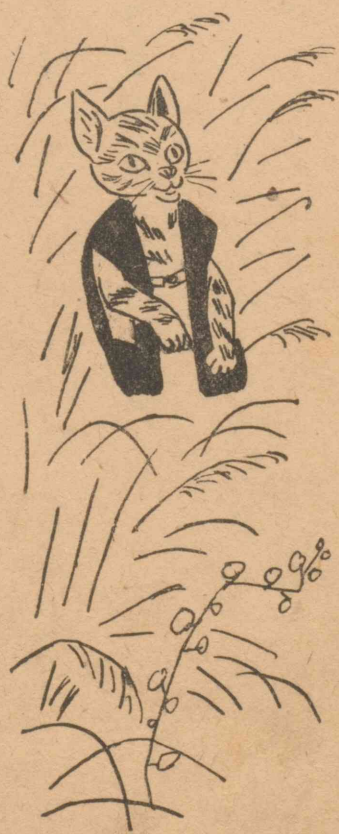
「わしはやまねこさまのぎよしゃだよ。」

といいました。

そのとき、風がどうどふいてきて、草はいちめん波だち、ぎよしゃはきゅうにていねいなおじぎをしました。

いちろうは、おかしいと思つてふり返つてみますと、そこに、やまねこが、黄色なじんぱおりのような物を着て、みど

り色の目をまんまるにして立っていました。やっぱりやまね  
この耳は立ってとがっているな、と思いつながらみると、  
やまねこは、ひ  
げをぴんとひっ  
ぱって、はらを  
つきだしていい  
ました。



「きょうはよく  
きてくださいました。じつは、おとといからめんどうなあ  
らそいがおこって、ちよつとさい判にこまりましたので、  
あなたのお考えをうかがいたいと思いましたが、まあ、

ゆっくりお休みください。じき、どんぐりどもがまいりま  
しょう。どうも、毎年このさい判で苦しみます。」  
そのとき、いちろうは、足も  
とでパチパチしおのはねるよう  
な音をききました。びっくりし  
てかかんでみますと、草の中に、  
あっちにもこっちにも、こがね  
色のまるいものが、ぴかぴか光っているのです。よくみる  
と、これはみんな赤いズボンをはいたどんぐりで、その数と  
いったら、三百でもきかないほどでした。ワアワアとみんな  
なにかいっているのです。





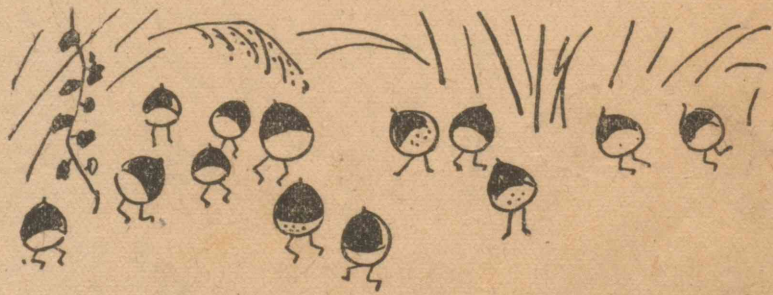
「あ、きたな。ありのようにやってくる。おい、さあ早くベルを鳴らせ。きょうは、そこが日あたりがいいようだから、そこんとこの草をかれ。」

やまねこは、大いそぎでぎよしやにいつけました。ぎよしやもたいへんあわてて、こしから大きなかまをとりだして、ザックザックとやまねこのまえのところの草をかりました。そこへ四方の草の中から、どん

ぐりどもがきらきら光ってとびだして、もうワアワアいっていました。

ぎよしやは、こんどは、すずをガランガラン、ガランガランとふりました。すずの音は、かやの森にガランガラン、ガランガランとひびき、こがね色のどんぐりどもは、すこしずつしずかになりました。みると、やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゆすの服を着て、どんぐりどものまえにすわっていました。ぎよしやは、こんどは、草むらをむちて二三べん、ヒユウパチツ、ヒユウパチツと鳴らしました。

「さい判も、もうきょうで三日めだぞ。いかげんになかなかおりをしたらどうだ。」



やまねこがすこし心配そうに、それでもむりにいばって

いますと、どんぐりどもは、口々にさげびました。

「いいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。そうして、わた



くしがいちばんとがっています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいから、わたしがいちばんえらいんだよ。」

「いや、ちがうよ。わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだよ、そんなこと。せいの高いんだよ。せいの高いことなんだよ。」

「おしあいの強いものだよ。おしあいしてきめるんだよ。」

もうみんなガヤガヤ、ガヤガヤいって、なにがなんだか、まるではちのすをつついたようで、わけがわからなくなりました。そこで、やまねこがさげびました。

「やかましい、ここをなんと心える。しずまれ、しずまれ。」

ぎよしゃがむちをヒュウパチツと鳴らしましたので、どんぐりどもはやっとしずまりました。やまねこはぴんとひげを

ひねっていいました。

「さい判も、もうきょうで三日めだぞ。いかげんになかなかおりましたらどうだ。」

すると、また、どんぐりどもが口々にいいました。

「いえいえ、だめです。なんといったって、頭のとがったものが、いちばんえらいんです。」

「いえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「ちがうよ。大きなことだよ。」

ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだかわからなくなりました。やまねこがさけびました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心える。しずまれ、し

ずまれ。」

ぎよしゃが、むちをヒュウパチッと鳴らしました。やまねこが、ひげをひねっていいました。

「さい判も、もうきょうで三日めだぞ。いかげんになかなかおりましたらどうだ。」

「いえいえ、だめです。頭のとがったのが——」

ガヤガヤ、ガヤガヤ——やまねこがさけびました。

「やかましい。ここをなんと心える。しずまれ、しずまれ。」

ぎよしゃがむちをヒュウパチッと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。やまねこがいちるうにそっと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

いちろうはわらって答えました。

「そんなら、こういいわたし  
たらいいでしょう。この中  
で、いちばんばかで、めっちゃ  
くちゃで、まるでなってな  
いのがえらいとね。」

やまねこは、なるほどとい  
うようにうなずいて、それか  
ら、いかにも氣どったようす  
で、しゅすの着物のえりを開  
いて、黄色のじんばおりをち



よっとだして、どんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。この中で、いち  
ばんばかで、めっちゃくちゃで、てんでなってなくて、頭の  
つぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりどもは、しんとしてしまいました。それはそれ  
はしんとして、だまってしまいました。

そこで、やまねこは、黒いしゅすの服をぬいで、ひたいの  
あせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。ぎよしゃ  
も、大喜びで、五六べん、むちをヒュウパチッ、ヒュウパチッ  
と鳴らしました。やまねこは、

「どうもありがとうございます。これほどのひどいさい判を、

まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれから、わたしのさい判所のめいよ判事になってください。これからも、はがきがいったら、どうかきてくださいませんか。そのたびにお礼はいたします。」

といたしました。

「しょうちしました。お礼なんかいりませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしの人格にかかわりますから。そうして、これからは、はがきに、かねたいちろうどのと書いて、こちらをさい判所としますが、ようございますか。」

「ええ、かまいません。」

といたしますと、やまねこは、まだなにかいいたそうに、しばらくひげをひねって、目をぱちぱちさせていましたが、どうとう決心したらしく、いいだしました。

「それから、はがきのもんくですが、これからは、用事これあるにつき、明日出頭すべし、と書いていいでしうか。」  
いちろうはわらっていいました。

「さあ、なんだかへんですね。それは、やめたほうがいいでしょう。」

やまねこは、どうもいいようがまずかった、いかにもぎんねんだというふうに、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、やっどあきらめていいました。

「それでは、もんくはいままでのとおりにしましょう。そこ  
できょうのお礼ですが、あなたは、こがねのどんぐりニリッ  
トルと、しおぎの頭と、どちらがおすきですか。」

「こがねのどんぐりがすきです。」

やまねこは、さけの頭でなくてまあよかったというふうに、  
口早にぎよしゃにいいました、

「どんぐりをニリットル早く持ってこい。ニリットルにたり  
なかつたら、めっきのどんぐりもまげてこい、早く。」  
ぎよしゃは、さっきのどんぐりをますにいれて、はかって  
さげびました。

「ちようどニリットルあります。」

やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴りました。そこ  
で、やまねこは、大きくのびあがって、目をつぶって、半分  
あくびをしながらいいました。

「よし、早く馬車のしたくをしろ。」

白い、大きなきのこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされ  
ました。そうして、なんだかねずみ色のおかしなかたちのう  
まがついています。

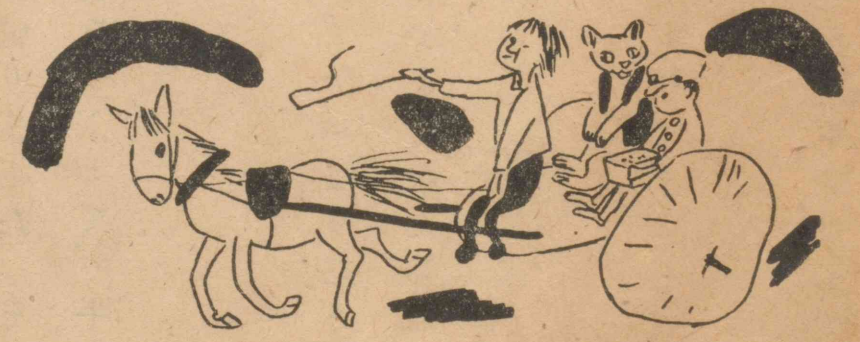
「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」

やまねこがいました。ふたりは馬車に乗り、ぎよしゃは  
どんぐりのますを馬車の中に入れました。

ヒュウパチツ。馬車は草地をはなれました。木ややぶが、

けむりのようにぐらぐらゆれました。  
いちろうは、こがねのどんぐりをみ、  
やまねこは、とぼけた顔つきで遠く  
をみていました。

馬車がすすむにしたがって、どん  
ぐりはだんだん光がうすくなって、  
まもなく馬車がとまったときは、茶  
色のどんぐりにかわっていました。  
そうして、やまねこの黄色のじんば  
おりも、ぎよしゃも、きのこの馬車  
も、一どにみえなくなつて、いちろ



うは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持って  
立っていました。

それからあと、「やまねこ拜」というはがきは、もうきません  
でした。やっぱり、「出頭すべし」と書いてもいいといえればよかつ  
たど、いちろうはときどき思うのです。



七 貝づか

みんなで、学校から四キロほどある貝づかへいきました。先生が、町角まで行って、待っているようにとおっしゃったので、めいめい、シヤベルや移植ごてなどを持って、角のむきみ屋のところを集まっています。

おかみさんが、店の人とふたりで、せっせと貝をこじあけて、むきみをつくっていました。みるまに、貝がらの山が家のまえにできます。先生が、リヤカーに、はこやかごなどをのせておいでになりました。



「ごらんなさい。いまでもこうやって、人は貝をたべています。むかしといっても大むかしのことだが、貝などをおもにたべていたときがあったらしい。その貝がらをすてたところが、きょうこれからいく貝づかですよ。」

先生について、五十人のなかまが、おくれなないように歩いていきました。平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高くなったところがみえます。

「むかし、このへんは、波のおだやかな海



のいりえだったのです。そう、あの向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしよ。あれが貝づかです。」

もうすこしで貝づかに着くといふところで、先生は一けん  
の農家にたちよられました。しばらくして、その主人といっ  
しよにでておいでになりました。

「きょうは、このかたの畑をすこしほらせてもらうことにし  
ます。」

主人も、くわや、ふごや、かごなどを持ってきて、かして  
くれました。

そこへ着くと、先生はステッキを深く土の中へお立てにな

りました。土はやわらかで、ずぶずぶど、  
ステッキのたけいっばいにはいります。

「ここが、このあいだからよくお話して  
いた貝づかです。この土の上に白くみ  
えているのは、むかし海の中にいた  
るいろな貝のからです。」

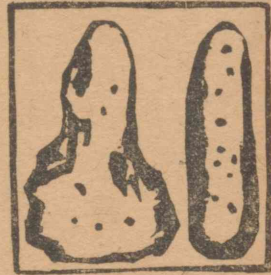
むかしの人は、貝がらといっしよに、  
いらなくなったりこわれたりした道具  
や、たべたけもののほねや、角などを、  
ここへすてました。それで、ここをほ  
ると、そういうものがみつかることが



あるのです。ひとつこれからほってみることにしましょう。  
私たちは、もう、ほってみたくてうずうずしていました。  
「まあ、おちついて、ゆっくりしごとにかかりましょう。」  
「まずどんなふうにはりますか。」

「ありそうなどころをほってみます。」  
「ありそうなどころって、どんなところでしょう。」

「それはちよつとわかりませんね。もし、手あたりしだいに  
やって、ぐあいよくなにかをほりあてたらいいが、ただ、  
あっちこっちほってみて、なんにもみつからないと、だめ  
だと思つてやめてしまう。これがふつうです。」



「ぼくは、どこか一つのところをきめて、廣  
く深くほっていくのがいいと思います。」  
「それがよさそうだね。それではず、一メ  
ートルぐらいのはばで、東西に四五十メー  
ートルほってみることにしよう。貝や石ころは、どれか一つ  
のかごに入れておこう。」  
「そこでみんなは、ほりだしました。」  
「なんにもないぞ。」  
「だめだな、ここは。」

「先生、ここは貝ばかりですよ。」  
口々にこんなことをいうのを、先生は、耳にもおいにな

らないで、ひとりでたんねんにほっておいてになります。ほくらは、ときどき手をどめて、そこをのぞきにいつてみると、先生のかごの中には、いつのまにか、せきふらしい物、土器らしい物、ただのわり石のような物などがたまっていきます。

「先生のところは、いろいろでるらしいぞ。」

「ここからも、でるかもしれないぞ。」

「いっしょうけんめいやってみよう。」

私たちは、だんだんしんけんになってほりました。

「そら、これはせきふらしいぞ。」

「そうだ、たしかにそうだ。先生のところにあるのと同じだね。」

「おや、これはなんだろう。」

「はりみきたいだね。」

「ほねで作ったものらしいよ。」

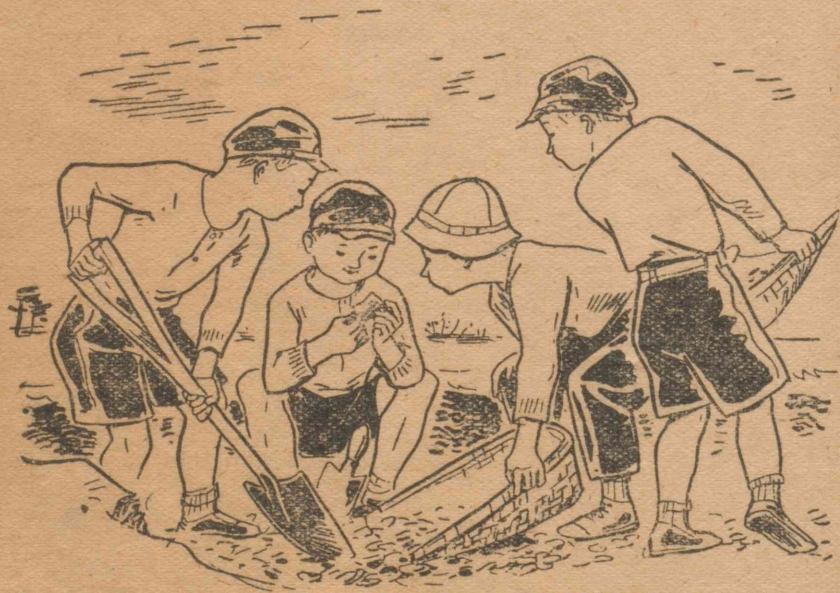
「ほく、先生におたずねしてみよう。」

「私にかけていって、先生におたずねしますと、

「よくみつけたね。あとでよくみてあげるから、かごに入れてとっておきなさい。」

「と、しずかにおっしゃいました。」

と、しずかにおっしゃいました。



「せともののかけらみたいなものがあるじゃないか。  
先生がまわっておいでになりました。」

「これかね。これはじょうもん土器といって、貝づかからで  
る物では、いちばん多い土器です。とって  
おきなさい。」  
だれもかれも、あせを流し、顔をまっかに  
してほっています。



先生のふえが鳴りました。みんなはほる手をどめました。

「これで三十分ほりました。わたしは、なんにも説明しなかつ  
たが、みなさん自身で、だんだんいろいろなことを知って  
くると思います。みなさんのひろった物の中に、いのしし  
やしかの角などに手を加えて、なにかの道具につかった物  
があつたでしょう。それには、こんなはりや、もりなどが  
あります。」

石で作ったもの、それには石のやじり、おもりなどいろ  
いろあります。ここからでるのは、このどおりうちくだい  
て作った物で、つるつるみがかれていないから、ただのわ  
り石のようにみえる物もあります。

それから土器。これはじょうもん土器という種類で、こ  
んなただのせともののかけらがと思うような物ですが、こ  
れはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろっ  
ておきなさい。さあ、あと三十分ほってみましょう。」

もう、むだ口をきく人は、ひとりもありませんでした。四人が話しあってしらべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいれておきました。

ピリピリッとふえが鳴りました。あとの三十分は、ひじょうにみじかく思われました。

「かごをこのリヤカーにつみなさい。それから、道具を集めて、めいめい持ってきた物があるか、おしらべなさい。いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整りしましょう。」  
帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをおして歩きました。

## 八 なかよし

とき ある晴れた日の

午後

ところ 学校の帰り道

人 たかぎ・やまだ

そのほか友だち

大ぜい

ぶたいの中ほどに大きな



木が一本立っている。

「おい、よしたまえ。よせたら。だめだよ、きみ——けんかをとめる声がつづく。まくがあく。

たかぎとやまだが左右にひきわけられたところである。たかぎには友だちの一、二、三、やまだには四、五、六、そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。

一 「よせよ、たかぎくん。」

四 「さあ、やまだくん、これでひきわけだ。」

やまだ 「いやだ。」と、たかぎをにらみつける。

たかぎ 「ぼくだっていやだ。」と、つかまれている手をふりはな

そうとする。

二 「まだやるのか。」

たかぎ 「やるとも。」

三 「よせよ。どうしたんだい。あんなになかのいいふたりか。」

五 「へんだよ。ふたりとも——さあ、いいかげんにして帰ろうよ。ね、やまだくん。」と、つれていこうとする。

やまだ 「はなしてくれたら、ぼくはやるよ。」

たかぎ 「ぼくだってやるよ。さあこい。」

ふたりともむきになって、友だちの手からぬけだそうともがく。

みんなですれをおしとめる。

一 「もういいいったら——」

四 「みつともないよ。学校の帰りじゃないか——」

二 「たかぎくん、帰ろうよ。やまだをかこんでいる友だちに、

「さあ、きみたち、やまだくんをつれていけよ。」

六 「うん。」 やまだの手をひっぱって、「いこうよ、やまだくん。」

やまだ ひっぱられながら、「もうきみとは遊ばないからな。」

たかぎ 「いいとも、だれがきみなんかと遊ぶもんか——」

五 「もういいいったら——」 と、やまだのせなかをおしながら

らさる。

そのほかの友だちが、落ちていゝるやまだのかばんやぼうしをひろつてあとにつづく。一、二も、たかぎの落した物を集める。

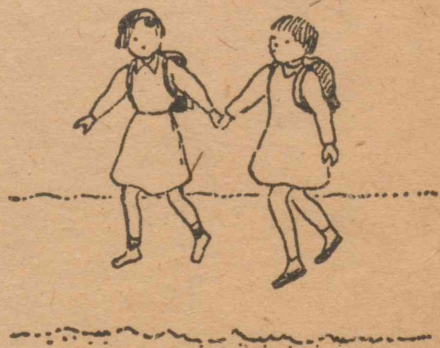
三 たかぎの服のほこりをはらいながら、「どうしてけんかなんかしたのさ。」

一 「びっくりしたよ。いっしょに歩いているうちに、きゆうにつかみあいをはじめたもの。」

二 「もういいじゃないか、そんな話——たかぎくん、いこうよ。」

友だち、たかぎをかこみながらさる。

そのあと、学校帰りの女の子ふたり、通りすぎる。まもなく、  
一、二年ぐらいの男の子、大きな声で、「七、八、九、十」と  
数えながら、大またでびよん  
びよんかけてきて、「十」でとま  
る。うしろを向いてじゃんけ  
んをする。こんどは負けたら  
しくたちどまって待っている。  
勝った子が、「一、二、三——」  
と数えながらぶたいのはしま  
できてとまる。



またじゃんけんをする。こうしてふたり、じゅんじゅんに

ぶたいをさる。しばらく、間——

やまだ、さがし物のようすで地面をみながらでてくる。なか  
なみつからない。そのうちに、セルロイドの三角じょうぎ  
をひろいあげる。しかし、自分の物ではないので、それをぶ  
たいのおくになげすてて、なお、あちこちさがしつづけなが  
らさる。

しばらくすると、たかぎもさがし物のようすでてくる。首  
がいたいらしく、手でさすっている。そのうちに新しいすみ  
をひろいあげるが、自分の物ではないので、なおあたりをさ  
がしている。

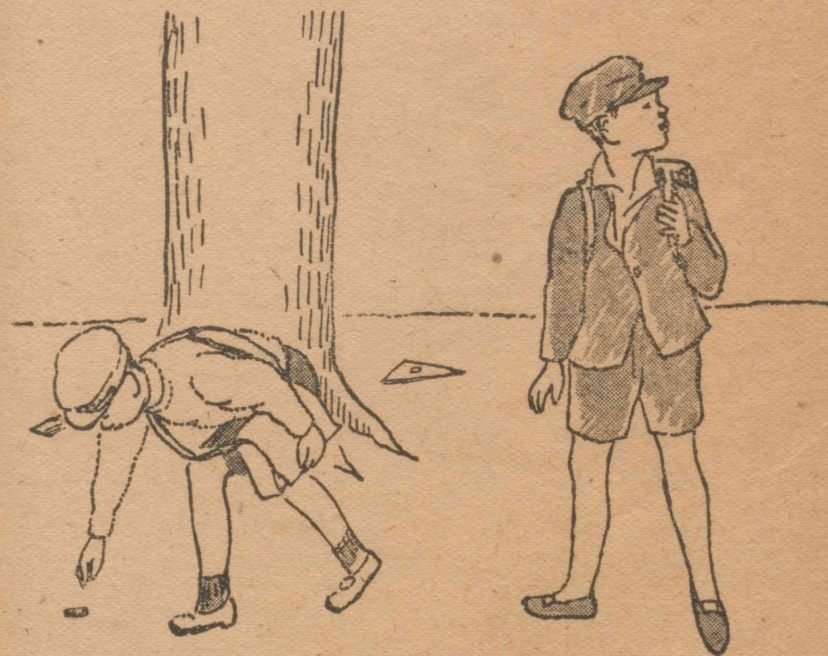
そこへやまだが帰ってくる。両方ともあいてに気がつくが、



わぎと知らないふりをして  
いる。

たかぎ　しばらくして持って  
いるすみに気がつき、  
ちよつとためらった  
のち、「これ、きみの  
だろう。」

やまだ、はなれたまま、た  
かぎの手もとをみている。  
さがしていたすみである。  
受けとりにくい氣持でいる



が、やがて思いきって、たかぎのそばにより、だまっただまま  
それをとりあげる。そうしてさっさといきかけるが、ぶたい  
はして足をとめる。

やまだ　わぎとたかぎの顔をみないようにして、「きみはなにを  
なくしたんだ。」

たかぎ、ちよつとやまだの方をみるが、返事をしないでさが  
し物をつづける。

やまだ　「しょうぎだろう。」

たかぎ　「なんだっていいじゃないか。よけいなおせっかいさ。  
やまだ、おこっていきかけるが、思いなおして、さっすすて  
たじょうぎをひろってくる。」

やまだ たかぎのまえにじょうぎをつきだして、「きみの名まえ  
が書いてある。」

たかぎ 「あつ、それだ。」と喜ぶが、やまだの顔をみると、きゆう  
にまたつんとなつて、だまってそれをとり、かばんにい  
れる。そのあいだに、やまだがいきかける。そのうしろ  
すがたをみて、「ちよつと待て。」

やまだ 「なんだ。」と立ちどまる。

たかぎ ぶたいのすみからボタンをひろってくる。「これきみが  
落したボタンだろう。」

やまだ 「落したんじゃない。きみがむしりとつたんじゃないか。  
と、ボタンをとる。」

たかぎ 「首をひっかいたからさ。」

やまだ ボタンをちぎれた服  
の糸にむすびつけようとする

たかぎ、それをのぞきこむ。

やまだ、みせまいとしてから  
だをねじつてかくす。たかぎ、  
首をさすりながら、その場に  
ぼんやり立っている。

やまだ ちよつとたかぎをみて、

「おい。」

たかぎ 「なんだ。」



やまだ 「首、いたいのか。」

たかぎ 「ぶつきらぼうに、「いたかない。」

ふたりだまる。たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そっ

とやまだに近づく。

たかぎ 「おい、ボタンついたか。」

やまだ 「つかなくたって、いいよ。」

たかぎ 「でも、あいこだ。」

やまだ 「なにがあいこだ。」

たかぎ 「すみをひろってやったじゃないか。」

やまだ 「ぼくだって、じょうぎをみつけてやったじゃないか。」

たかぎ 「だから、あいこだ。」

やまだ 「でも、きみはひどいよ。このボタンをみたまえ。」と

むねをみせる。

たかぎ 「ぼくの首をひっかいたのはだれだ。」と、首をさする。

やまだ 「そりゃあ——」

たかぎ 「だから、あいこだらう。」

やまだ 「そりゃそうさ。」

たかぎ 「でも、ぼくは二つなぐら

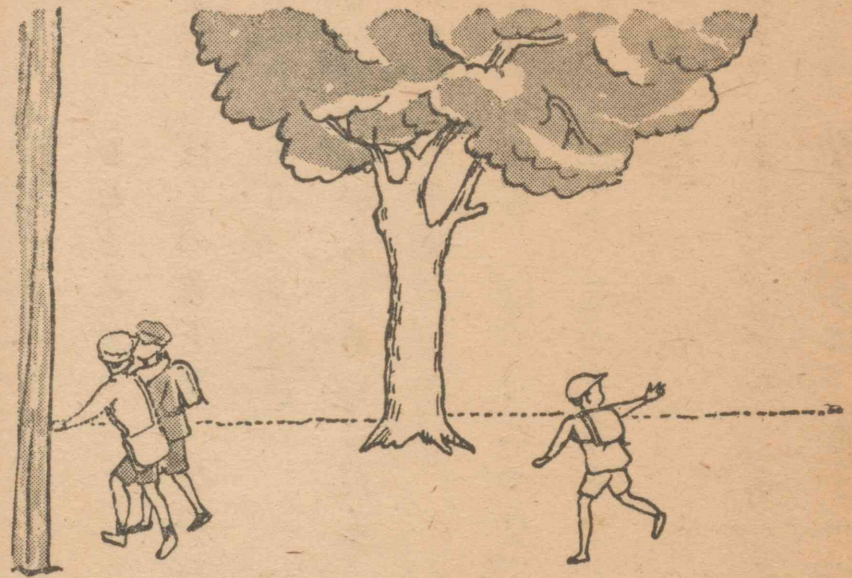
れて、三つきみをなぐっ

た。」

やまだ 「よし、じゃあ、あいこに

なるように、もう一つな





ぐってやる。」と、げんこをかためて右手をふりあげる。

たかぎ 「もうたくさんだ。」

たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。やまだ、思わずわらいだす。たかぎもわらう。

たかぎ しずかに、「でも、いやだな、けんかしたあとの氣持って。」

やまだ 「ぼくもそうさ。」

たかぎ 「きみ、もうよそうよ。」

やまだ 「かんにんするかい。」

たかぎ 「いや、ぼくがいけなかったのさ。」

やまだ 「ぼくもわるかったよ。」

たかぎ 「いったい、なんでけんかをはじめたんだらう。」

やまだ 「つまらないことさ。ぼくがあんまりじまん話をするも

んだから——」

たかぎ 「あ、そうそう。それで、ぼくも負けまいと思ったんだ。じまん話をはじめると、自分がいちばんりっぱだと思いうもんだね。なんだか、いま考えるとはずかしい氣持

さ。

やまだ 「友だちにまで心配させて——」

たかぎ 「いっしょにあやまろう、あした——ねえ、きみ、うち  
によって、ねえさんにそのボタンをつけてもらわない。」

やまだ 「けんかの話をするのかい。」

たかぎ 「してもいいさ。」

やまだ 「そう、してもいいね。」

たかぎ 「じゃあ、いこう。」

やまだ 「首は——」

たかぎ 「なかなおりしたら、よくなった。」

やまだ 「たかぎの首をのぞきながら、でも、みてあげよう。」

たかぎ 「だいじょうぶだよ。さあ、いこう。」

やまだ 「いこう。」

ふたり、なかよくかたを組みながらさる。

——ま——

九 山のスキー場

ぼくたち四十人は、のだ先生といし先生につれられて、山のスキー場へいった。

まえの日に、こな雪がたくさんふったので、スキーをするには、ちょうどよかった。

集合地は、村はずれの一本すぎのそばであった。ぼくた



ちは、リックサックをせおって、スキーをつけ、二本のつえをつきながら、そこへ集まった。

「みんなそろったね。さあ、でかけよう。」  
と、のだ先生が先頭に立たれ、いし先生は、みんなのあとからこられた。

はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。だんだんのぼり坂になると、からだがかほってあせがでる。みんなだまって、あえぎながら登っていた。スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。きゆうな坂にかかると、まえの方で、のだ先生が、  
「さあ、元氣をだして。」

ど、大きな声をかけられる。いしい先生も、ずっとうしろの方から、

「しっかり登れ。」

とさげられた。その声にはげまされて、ぼくたちは、いっしょうけんめいに登っていった。

まつ林の中を歩いてい

くとき、だれかが、  
「やあ、うさぎ、うさぎ。」

ど、大声にさげんだ。みると、大きなうさぎが、ちゅうと小まつの中へとびこんだところであった。

「あれがスキー場だ。もうひと息。」

ど、のだ先生がつえてさされる方をみると、なるほどりっぱなスキー場で、ジャンプ台もみえる。みんなは喜んで、きゆうに元気をだした。  
「いよいよ、スキー場に着いた。い

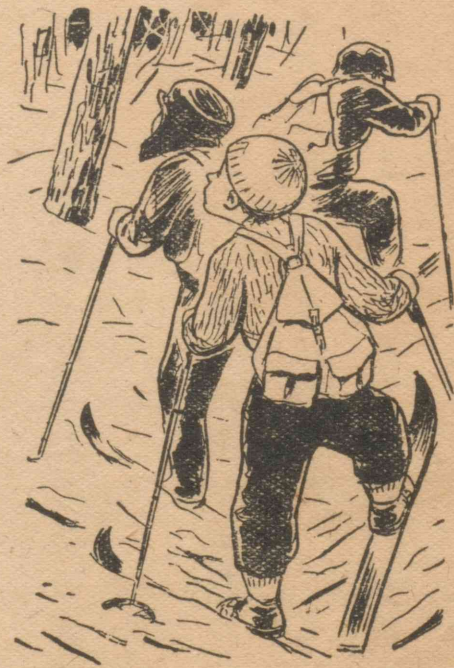


かにもすべりよさそうないしゃが、長くつついている。

「先生、まだすべってはいけませんか。」

「先生、もうすべらしてください。」

ど、みんながいうと、



「待て、待て、もうすこし上までいこう。」

と、いしい先生がうしろの方から追いたてるようにいわれた。

百五十メートルほど登ったとき、ぼくが、

「先生、もういいでしょう。」

といった。すると、のだ先生が、

「ようし、ここからすべりたい

ものはすべってよろしい。」

といわれた。



ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文字にすべりおりた。すばらしい早さに、からだもスキーも一つになって、ピエウとうなる。まるで、空中かつそうをしているようだ。ふもとへきて、急停止すると、ぱっと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこながふりかかる。

やがて、十人、二十人、つきつきにすべりはじめた。思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。とちゅうでころんで、雪だるまになっておきあがるものもある。にこにこわらいながらおりてくるもの、まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。みんなが急停止をすると、雪けむりが一どにあがった。

先生は、ふたりとも、まだ上へ上へと登っていかれたが、



三百五十メートルも登ったところで、つえをあげて、「さあ、おられるよ。」というあいずをされた。ぼくたちも、みんなつえをふって、それに答えた。

のだ先生がさきに、すぐつづいていしい先生がすべられる。そのみごとなすべりぶりにみとれていると、先生たちは、もう目のまえにこられた。はげしい制動をかけられると、もうもうと雪けむりが立つ。雪けむりがきえて、先生のお顔がかぶ。

それから、ぼくたちは、登って行ってはすべり、おりてはまた登った。

ジャンプ台では、じょうずな人たちが、かわるがわるジャ

ンプをしている。

「おうい。先生がジャンプをなさるそうだ。」

と、だれかがさげんだ。みんなそこへいくと、いま、いしい先生がすべられるところである。たちまち先生のからだは、ちゅうにうかんだ。両手をひろげて高くとばれるすがたは、なんとという勇ましさであらう。みんなは思わず手を



たたいた。

こんどは、のだ先生がとばれるばんである。先生は、はちまきをして、すべりだされた。すばらしい早さだ。

「すごい。」

先生のからだは、美しくちゆうをとんでいく。

「ばんざい。」

と、だれかがさげんだ。

「のだ先生。」

と、だれかがさげんだ。

四十メートルも空中をとんで、先生は地上の人となられた。お晝になったので、雪の上で楽しくおべんとうをたべた。

午後は、

先生につい

て、ひとり

ひとり、正し

いすべりか

たを教えて

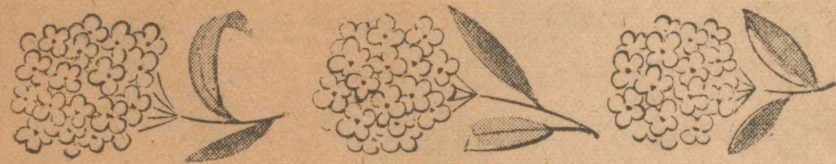
いただいた。

帰りは、

村までくだ

りの坂道だ。林をぬって長いきよりをすべるのは、ほんとうにゆかいてあった。

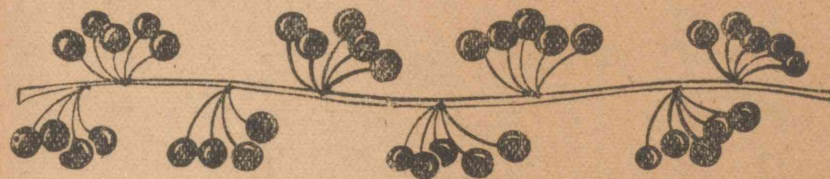




いまの鳥はこの木にいるにちがいなしひそかにえだ  
葉の中をみあぐる

着ぶくれて歩かされいし女の子はたんとたおれそ  
のままなくも

赤いぬの一ぴきゆけばこの町のそこここよりぞい

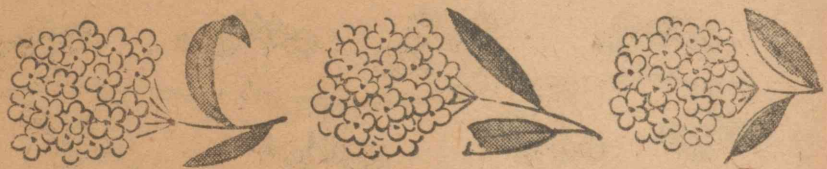


十 ちよ紙

いもうどの小さき歩みいそがせてちよ紙かいにゆ  
く月夜かな

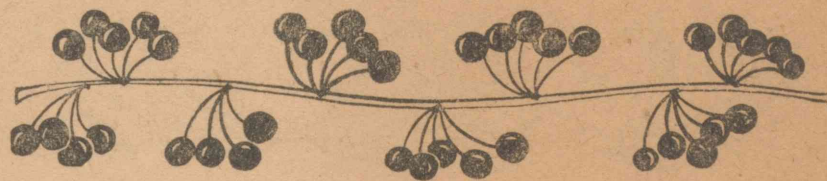
水ぐるま近きひびきにすこしゆれすこしゆれいる  
こでまりの花





ふくじゅそうのはちをおきかうるおさな子やえん  
がわの上につる日を追いて

たべのこしの  
めしつぶまけばうちつどう  
すずめの子らと日なたぼこする



ぬのあらわる

階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなま  
くらなり

屋根の雪かきおとしいる少年の顔の明かるさ日の  
てる中に

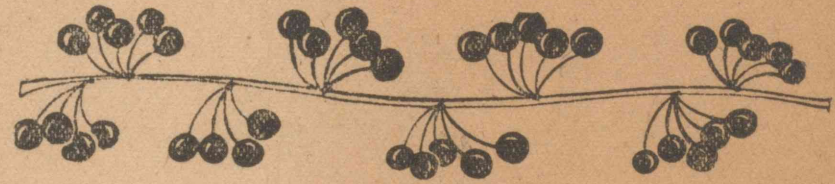
ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにいてす  
ぎの山しずか

ふくじゅそうの  
つぼみいとおしむおさな子や  
夜はいろりの火にあてており



金色の小さき鳥のかたちしていちようちるなりお  
かの夕日に

ほおずきを口にふくみて鳴らすごとかわずは鳴く  
も夏のあさ夜を



十一 いずみを求めて

十のころであった。私は父につれられて、近くの高い山に  
登った。その帰りに、近道をして谷をおりてくると、そこに  
小石でかこまれた美しいいずみがあった。

父は、そのいずみの水を手ですくって、いくともうまそう  
に飲んでから、私にいった。

「どうだ。この水を飲んでごらん。これは、名高いいずみな  
んだよ。」

水は大きなごろごろした石ころのあいだから、ブツブツと

音をたててわきだして、一方のかけたところから、さらさら  
と流れだしていた。

私は手をいれて、それをすくお  
うとすると、おく山の雪がどけて  
そのまましみてきたかと思われる  
ようにつめたかった。ちよつと齒  
にしみたが、うまかった。あまい  
ような、すずしいような、氣の晴  
れ晴れするような味だった。

「そこに流れているのがまつ川だ。私たちの村の用水も、こ  
のまつ川からひいてあるのだ。」



いずみをあふれてた水は、さらさらと走って、やがて、す  
ぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。

帰り道で、父は次のような話をしてくれた。

むかし、ひとりの茶人があった。茶のうまさは、お茶その  
もののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがだいいちであ  
る。なんとかしてうまい水のわきでるいずみをさかしたした  
いものと思った。

茶人は、日本じゅうを歩きまわって、うまそうな氷や名高  
い水道水をためしてみたけれども、どうも氣にいらなかった。  
ところが、てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶を  
たててみると、いままで味わったこともないような、ふしぎ

な味が感じられた。茶人は、この上流にいいいずみがあるのではないかと気がついた。船をやとってこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。すると、いい味は、もつと遠いところで感じられる。右岸や左岸では、その味がきえてしまうことがある。中ほどでは、いい味はたえなかつた。それで、茶人は、いずみはどうしても支流のほうにはなくて、遠い上流にあるのだとさどつた。

けれども、流れは急流だし、雨の日も風の日もある。さかのぼるのもたやすくなかつた。つれの人、この茶人ほど熱心ではないから、やめて帰ろうといった。しかし茶人は、いろいろなこんなをしのいで、みんなをばげましては上流へたどつていった。

大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなつてしまふ。あどもどりして飲んでみたり、ずっと上流へいつてためしてみたり、深いところの水をどつて飲んでみたりしなくてはならなかつた。

茶人はすこしもくつせず、求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかきもすぎ、ながの縣にはいつた。そうして、てんりゅうきょうという景色で名高いところもすぎて、四十キロあまりもきてしまつた。

ここまできると、てんりゅう川もよほど水かさかへつていた。ここで茶人のしたには、まきれもないいい味がはつきり

と感じられるようになった。

「きつと、いずみはこの近くにある。」

茶人はつれの人に行った。まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、いい味の水は、左の岸のほとりを流れていた。ためしにまつ川の水をにて飲んでみる

と、たいへんうまかった。念のため、もっと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であった。

「いずみはまつ川の上流にある。」

茶人は、長いたんきゅうの旅が終りに近づいたことを知って喜んだ。



茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそって上流に向かって

歩きながら、ときどき水をふくんで

はいずみをさがしていった。

はじめのハキロほど

は、村ざとがあつて川べ

りに道もあつたが、いまは

それもなく、なつて、大きな

岩がごろごろとゆくてをふ

さぎ、まつ林におおわれた道

もない谷まになつた。

そこからさらに、すこしさかのぼつて水を飲んでみると、





いい味は、すこしもなかった。

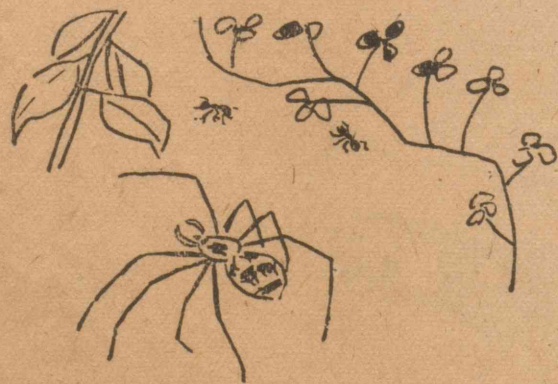
そこで氣をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。そこをくんで飲んでみると、それこそまぎれもないうまい水であった。

そこで、谷川をさらにさかのぼると、岩まからちよろちよろとわきでるいずみがあつて、それでもう終りであつた。茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてをつくり、いずみをくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだということである。

## 十二 一びきのくも

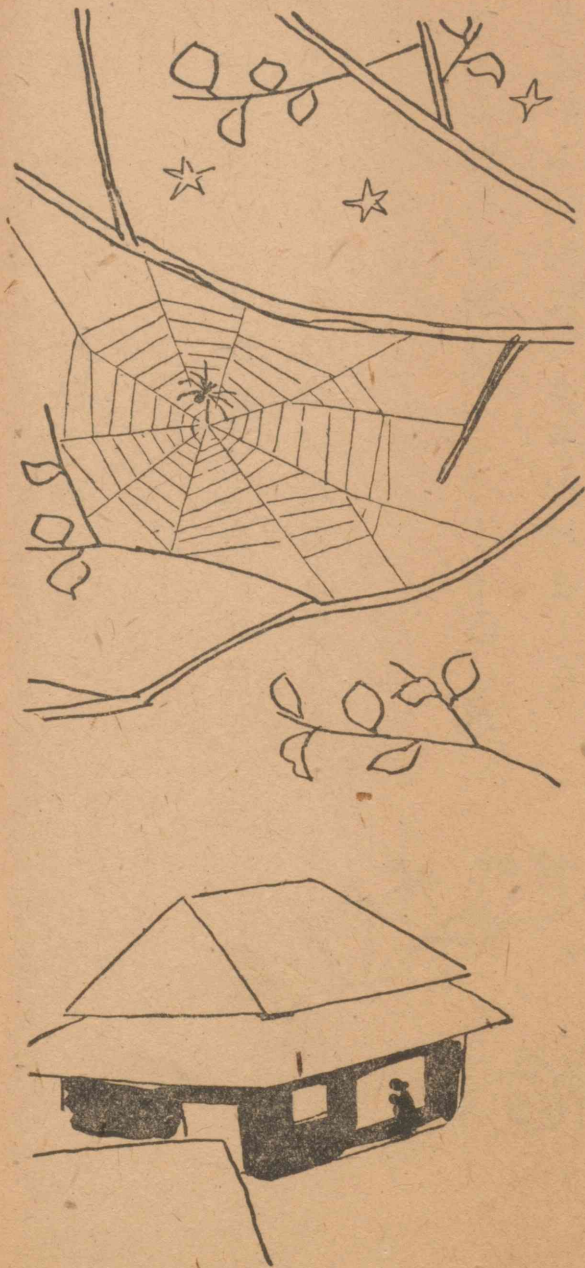
一びきのくもがいました。黄色と黒のしまもようのついた大きなくもでした。

ある日の夕がた、このくもは、木と木のあいだに、すをかけました。「今夜はうまいえさがかかるかな。この二三日というものは、ちっともかからなかつたから、おなが



すいてしまった。

ここ四五日は大風がふくし、雨はふるしで、あみもはることはできませんでした。



星が光りだしました。どこかであかちゃんのない声かして  
います。子もり歌もきこえてきます。くもは、その子もり歌  
を耳にしながら、光る星をみあげていました。

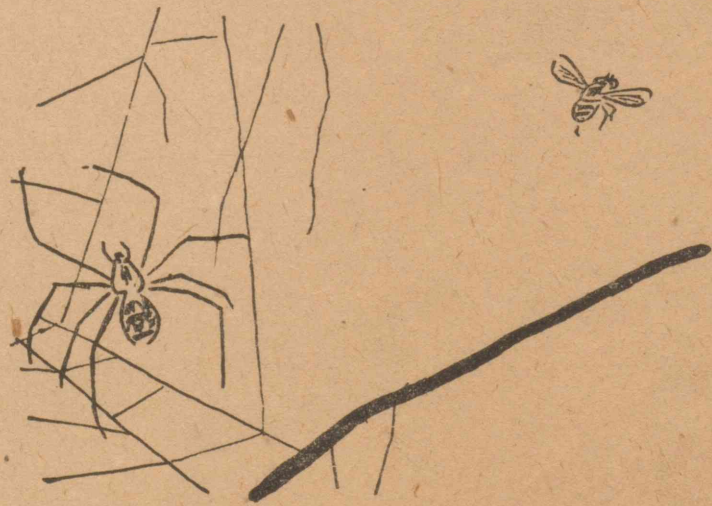
そのとき、あみがわかにゆれました。くもは、きつとなっ  
てその方をみつめました。あぶが、足をひっかけて、ブンブ  
ンいっているところです。

くもが、いきなりとびかかっていくと、あぶは、カいっぱ  
いはばたきをして、すいとにげていきました。おまけに、あ  
みに大きなあなをあけてしまいました。

「しまった。ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、や  
ぶれたところをつくりかけました。

「こんどこそは、にがさないぞ。と、くもは、足をふんばって身がまえをしました。」

星はだんだんきれいに光って  
きました。あかちゃんのない声  
も、子もり歌もきこえませんで  
した。風が思いだしたようにふ  
いてくるので、あみがゆれ、く  
ももいっしょにゆれました。  
ブンブンブン、ブンブンブ  
ンと、遠いところで、は音がし  
ました。



それは、みつばちであることが、くもにはすぐわかりまし  
た。

ブンブンブーン、は音がだんだん近づいてきます。

「あれが、うまくひっかかるといいな。」

くもが、じいっと息をこらして待っていると、みつばちは、  
くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

ブブブブ——

「そら、ひっかかった。」

くもはみつばちにとびかかりました。みつばちも、くもに  
向かいました。

くもは、ふといつなをとりにだして、みつばちのからだをし

ぱりつけようとなりました。みつばちは、そのつなをさけてにげようとしたが、どうしても手足がうまく動きません。そのうちにみつばちのからだも、つなにまかれそうになりました。ぐずぐずしていると、そのままたべられるので、みつばちはだいなはりをだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。それにはさすがの大きなくもも、びっくりしました。

「あいた、あいたたたた。」

くもが、手でさすっているあいたに、みつばちは、つなをほどいて、あみをくい切って、にげていってしまった。

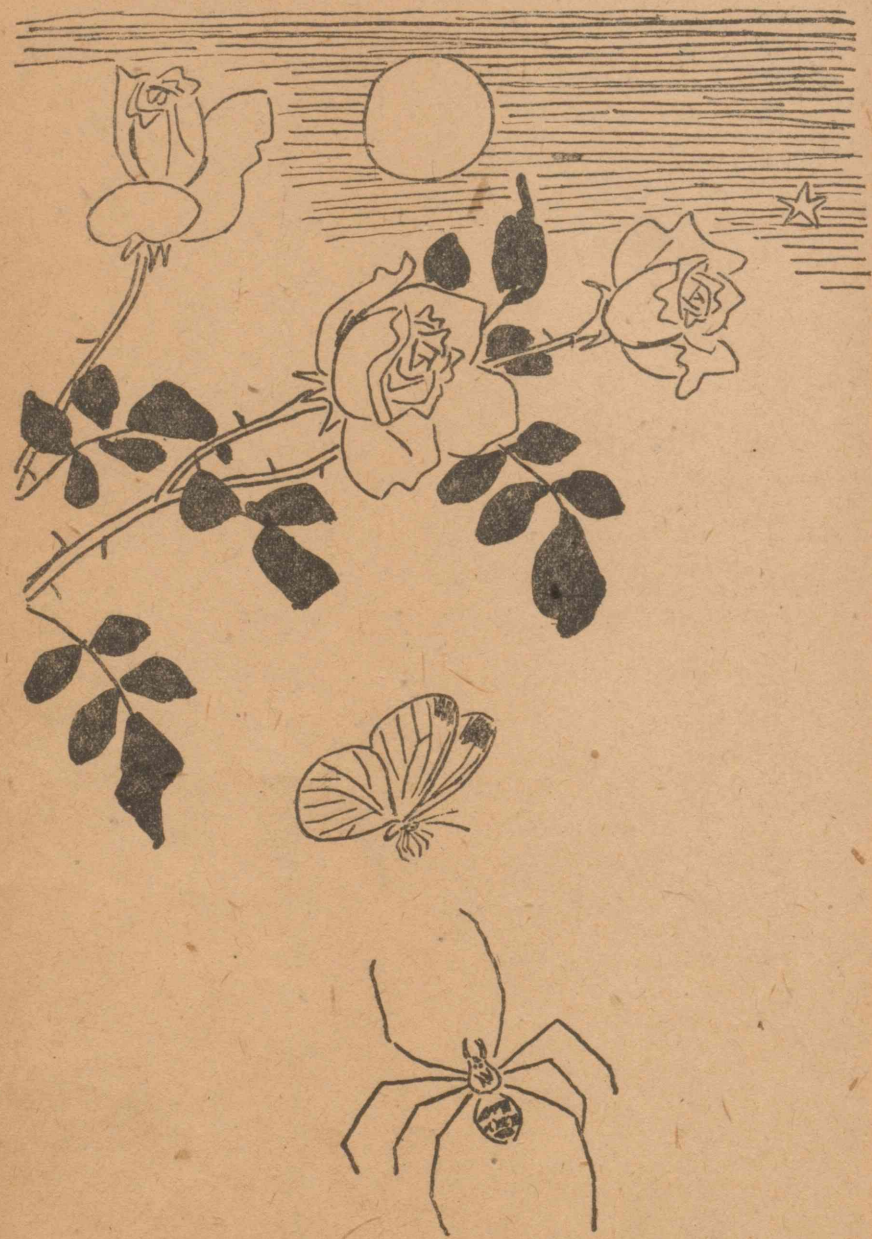
ゆうゆうととんで、にげていくみつばちのうしろすがたを

みていましたが、くもはどうすることもできません。それより、自分のからだかはれてくるし、いたいし、苦しくてどうにもなりません。

しばらく、目をつぶってしずかにしていると、また、パタパタという音がきこえてきました。

「あ、こうもりだな。」

思わずそちらをみると、こうもりは、ひょうきんなかつこうをして、こちらにとんできます。あみにつきあたってはたいへんど、くもが思ったとたん、ばさりとこうもりのはねにたたかれました。あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。



「あ、びっくりした。」  
くもが気がついてみると、あたりにいいにおいがします。  
まっ白なばらが、たくさんさいていたのです。  
いいにおいをかいてみると、いつのまにか、いままで苦し  
かったからだのいたみもきえていきました。  
目のまえのばらの花が動いています。おかしいなど、ふし  
ぎに思ってよくみると、それは白いちょうちよでした。  
「なんだ。ちょうちよか。ちょうどいいや。うまいごちそう  
だ。」  
くもは、長い手をのばして、わけなく白いちょうちよをと  
らえました。大きな口をあいてたべようとしたとき、ちょう

ちよは、

「くもさん、くもさん。ちよっと待ってください。」  
とたのみました。

こうたのまれると、だまってたべてしまおうわけにもいきま  
せん。

「なんだい、なんの用かね。」

「くもさん、あんないお月さん、みえないの。」

「なんだって、お月さん——」

くもは、首をねじって上の方をみあげました。いまのぼり  
かけたばかりの月が、しずかに光っていました。

「くもさん、あのお月さんのところへいってみたいと思いま  
せんか。」

「わたし一どでいいから、お月さんのところへいきたいと思  
います。」

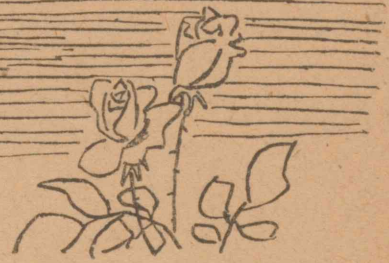
「どうして。」

「おかあさんをさがしてくるのです。」

「おかあさん。」

くもは、このおかあさんということばを、長いこと耳にし  
たことはありませんでした。また、口にしたことありません  
でした。

いま、ちようちよに、「おかあさん。」といわれて、きゆうに



なつかしくなりました。くもの小さなとき  
のことが、ゆめでもみるように思いたされ  
てきました。

「そうか、おかあさんをさがしにいきたい  
のか、ちようちよさん。」

「なんだか、わたしも、おかあさんをみた  
くなつたよ。」

「くもさん、今夜は助けてください。」

「ああ、いいとも。」

くもは、ちようちよを手ばなしました。

「ありがとう、くもさん。」

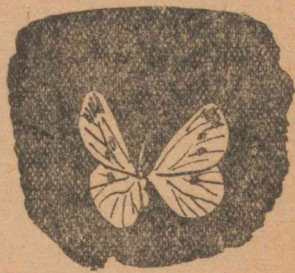
「あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと  
知っています。いまして、みつばちにさされて、苦しん  
だことも知っています。だから、わたしをたべてもいいと  
思っているんだけど。」

「いや、もう、おまえさんをたべやしないよ。」

「わたし、おかあさんにひと目あったら、もう、命はほし  
とは思いません。」

「それまで、命を助けておいてください。」

「わかった、わかった。さあ、早くとんでいくがいい。」



がら、

「ちょうちよさんは、はねがあるからいいな。」  
と、ひとりごとをいいました。

くもは、おなががすいているのに気がつき、また、あみをかけようと考えました。くもはそのそと歩きました。けれども、なんだか気がすすみません。それで、そのまま手足を

ちぢめて、じっとすわっていました。あたりには、やはりば

らの花のにおいがしていました。

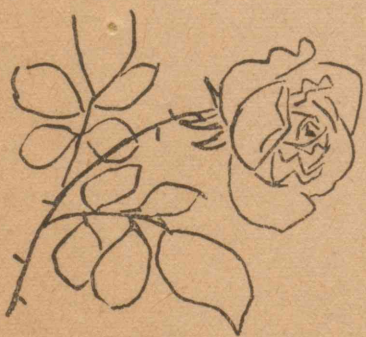
くもは、うつらうつらとねむく  
なってきました。

「今夜は、ばらのかげでねむるこ  
とにしようかな。」

くもはからだを小さくまるめて、

ころっと横になりました。目をつ

むると、だれかが、くもの頭をなでています。上をみると、  
わらっているではありませんか。くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。





「わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。」

「まあ、おまえは、わたしをわすれたのかい。」

「わたしは、おまえのおかあさんじゃないかね。」

おかあさんときいて、くもは、手をうんどのばして、どりすがろうとしました。そのひょうしに、くもは、目がさめました。

「なんとみじかいゆめだろう。」

と、くもは、いまみたばかりのゆめを、なんどもなんども思い返しました。

月はもう頭の上まできていました。つゆが木の葉にたまりました。たまったつゆが、しずくになって、ポタリポタリと落ちてきました。

くもは、目がさえてなかなかねむれません。

「くもさん、くもさん。どうしてねむらないの。」

こう話しかけたのは、ばらの花でした。

「もう夜ふけですよ。おやすみなさいな。」

くもは、なんどいって返事をしていいかわからないので、そのままだまっていました。

自分は、こうもりのために、高いところからたたき落され

たが、たまたま、あの白いちようちよにあうことができた。  
それから、いいゆめをみることもできた。いままた、ばらの  
花のやさしいことばをきくこともできた。

くもは、これらのことを一つ一つ思いだしているうちに、  
心持が、しだいにかわってきました。

ちようちよにしても、ばらの花にしても、なんとしずかな  
くらしをしているのだろう。なんとおだやかなくらしをして  
いるのだろう。それにくらべて、自分は、なんとあらっぽい  
くらしをしていることだろう。

あみをはり、かくれていて、ほかの虫がひっかかると、い  
きなりとびついてかみころすなんて、なんとひどいことをし

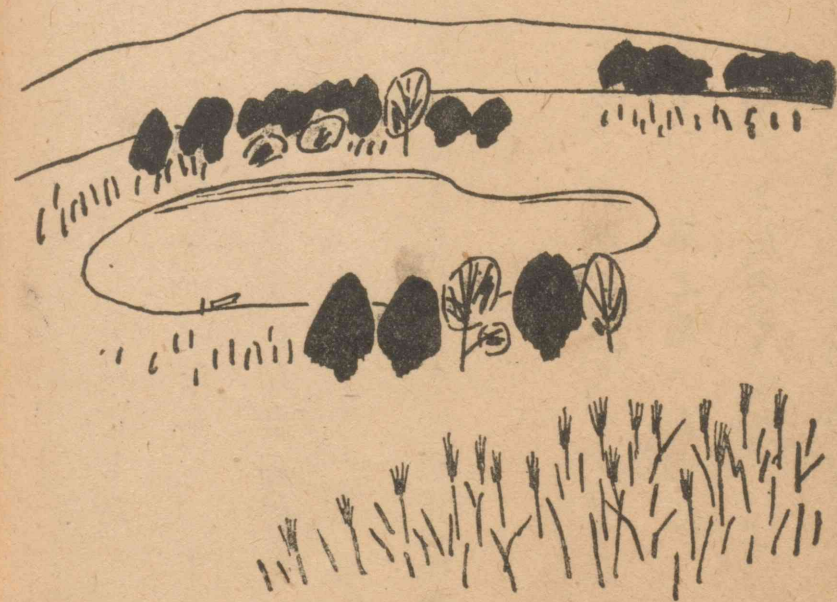
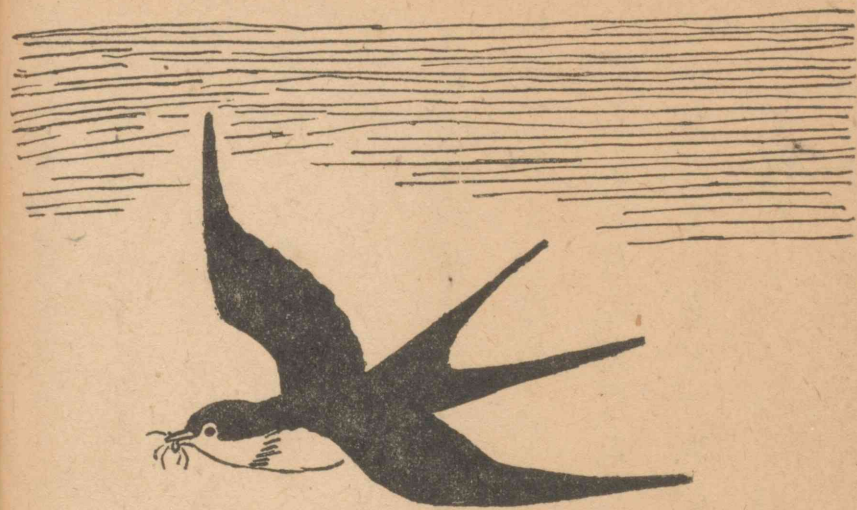
てきたものだろう。

くもは、そっと自分の手をのばし足をのばしてみました。  
ふしくれた手、どがった足、うすきみのわるいかたち、いま  
までにこの手で、この足で——くもは、自分ながら自分のか  
らだが、そらおそろしく思われてきました。

白ばらの花は、もう話しかけなくなりました。ぐっすりね  
むってしまったのでしょう。

くもが、月の光にちらりちらりと光りながら落ちてくる夜  
つゆをみていると、風がふいてきました。風と思ったのは、  
そうではなくて、つばめがすいととんできたのでした。

くもは、このつばめにひるわれました。くもは、つばめの



口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。

くもは、カいっばいもがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれない。

けれども、べつににげだそうとはしませんでした。つばめは、麦畑らしい土地の上を飛びました。湖の岸べを飛びました。深い森のそばを飛びました。

夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりとしらみかけてきました。

「自分の命は、つばめさんにあげよう。」

こう決心がつくと、くもは、すっかりらかな気持ちになりました。いまのいままで、みにくいと思っていた自分のからだ

飲 (119)	類 (85)	坂 (54)	湖 (32)	園 (23)	候 (19)	器 (6)
湯 (121)	急 (109)	服 (63)	貝 (33)	次 (23)	約 (19)	加 (8)
支 (122)	止 (109)	格 (70)	雜 (34)	養 (23)	協 (19)	港 (8)
熱 (122)	制 (110)	待 (76)	登 (36)	利 (23)	告 (19)	情 (10)
	勇 (111)	移 (76)	味 (36)	法 (24)	民 (20)	景 (10)
	階 (116)	主 (78)	判 (47)	燈 (29)	航 (21)	例 (10)
	求 (119)	説 (84)	拜 (47)	畑 (32)	社 (21)	演 (14)

も、もうみにくいとは思えなくなりました。  
「お月さんのところへとんでいったあの白いちようちよは、  
どうしたろう。うまくおかあさんにあえたかしら。」  
そんなことをくもは思いました。

國語 第四学年 下  
Approved by Ministry of Education  
(Date Jun .2 .1949)

昭和二十二年一月十五日 翻刻發行  
昭和二十三年八月三十日 修正翻刻發行  
昭和二十四年八月五日 修正翻刻印刷  
昭和二十四年八月二十五日 修正翻刻發行  
(昭和二十四年六月一日 文部省検査済)

定價 貳拾四円拾錢

著作權所有 文 部 省

翻刻發行 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
兼印刷者 東京書籍株式會社  
代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式會社堀船工場

發行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式會社

